

2020事業年度

財 務 諸 表

第 15 期

自 2020年 4月 1日

至 2021年 3月31日

(目次)

貸借対照表	1
損益計算書	3
キャッシュ・フロー計算書	5
利益の処分に関する書類（案）	6
行政サービス実施コスト計算書	7
重要な会計方針	8
注記事項	9
附属明細書	10
(1) 固定資産の取得及び処分並びに減価償却費（「第87 特定の償却資産の減価に係る会計処理」による損益外減価償却相当額も含む。）の明細	11
(2) たな卸資産の明細	12
(3) 有価証券の明細	12
(4) 長期貸付金の明細	12
(5) 長期借入金の明細	12
(6) 引当金の明細	12
(7) 資産除去債務の明細	12
(8) 保証債務の明細	12
(9) 資本金及び資本剰余金の明細	12
(10) 積立金の明細及び目的積立金の取崩しの明細	13
(11) 運営費交付金債務及び当期振替等の明細	13～14
(12) 運営費交付金以外の設立団体等からの財源措置の明細	15～16
(13) 役員及び職員の給与の明細	17
(14) 科学研究費補助金等の明細	18
(15) 開示すべきセグメント情報	19～20
(16) 上記以外の主な資産、負債、費用及び収益の明細	21

貸借対照表
(2021年3月31日)

(単位：千円)

資産の部		
I 固定資産		
1 有形固定資産		
土地		14,200,000
建物	19,567,718	
減価償却累計額	△ 9,154,524	10,413,194
構築物	147,643	
減価償却累計額	△ 57,287	90,355
機械装置	24,751	
減価償却累計額	△ 24,751	0
車両運搬具	13,367	
減価償却累計額	△ 13,367	0
工具器具備品	19,224,415	
減価償却累計額	△ 16,475,037	2,749,378
図書		36,489
有形固定資産 合計		27,489,417
2 無形固定資産		
特許権		106,916
特許権仮勘定		118,456
商標権		3,318
意匠権		3,928
電話加入権		680
ソフトウェア		115,109
ソフトウェア仮勘定		233,640
無形固定資産 合計		582,050
3 投資その他の資産		
敷金・保証金		148,567
投資その他の資産 合計		148,567
固定資産 合計		28,220,035
II 流動資産		
1 現金及び預金		4,396,998
2 未収入金		174,804
3 たな卸資産		28,443
4 前渡金		37
5 前払費用		7,351
流動資産 合計		4,607,635
資産 合計		32,827,671

貸借対照表 (2021年3月31日)

(単位：千円)

負債の部		
I 固定負債		
1 資産見返負債		
資産見返運営費交付金	3,994,213	
資産見返補助金等	129,184	
資産見返寄附金	18,413	
資産見返物品受贈額	2,059	
ソフトウェア仮勘定見返運営費交付金	233,640	
特許権仮勘定見返運営費交付金	118,456	
固定負債 合計	4,495,966	
II 流動負債		
1 預り補助金等	64,153	
2 未払金	2,381,044	
3 未払費用	58,548	
4 未払消費税等	2,175	
5 前受金	34,468	
6 預り金	18,042	
流動負債 合計	2,558,432	
負債 合計		7,054,399
純資産の部		
I 資本金		
1 地方公共団体出資金	28,051,831	
資本金 合計	28,051,831	
II 資本剰余金		
1 資本剰余金	2,001,917	
2 損益外減価償却累計額	△ 6,331,178	
資本剰余金 合計	△ 4,329,261	
III 利益剰余金		
1 前中期目標期間繰越積立金	19,576	
2 目的積立金	102,920	
3 積立金	412,087	
4 当期末処分利益	1,516,117	
(うち当期総利益)	(1,516,117)	
利益剰余金 合計	2,050,702	
純資産 合計		25,773,272
負債純資産 合計		32,827,671

損益計算書
(2020年4月1日～2021年3月31日)

(単位：千円)

経常費用			
I 業務費			
1	業務部門人件費	2,066,735	
2	賃金等	220,639	
3	退職給付費用	57,894	
4	業務費		
	業務委託費	400,545	
	備品費	51,916	
	消耗品費	432,733	
	保守管理費	353,104	
	減価償却費	880,055	
	その他業務費	509,106	
		2,627,463	4,972,732
II 一般管理費			
1	役員人件費	50,369	
2	管理部門人件費	795,545	
3	賃金等	107,412	
4	退職給付費用	73,107	
5	業務費		
	光熱水料	455,126	
	賃借料	244,772	
	受託管理費	305,922	
	保守管理費	341,105	
	業務委託費	255,386	
	減価償却費	319,552	
	その他業務費	196,860	
		2,118,725	3,145,160
III 雑損			
			1,306
経常費用 合計			8,119,198

損益計算書

(2020年4月1日～2021年3月31日)

(単位：千円)

経常収益		
I 運営費交付金収益		
1 標準運営費交付金収益	4,431,944	
2 特定運営費交付金収益	1,577,166	6,009,111
II 手数料収益		
		328,936
III 使用料収益		
		169,134
IV 受講料収益		
		3,430
V 指導事業収益		
		783
VI 受託事業収益		
1 国又は地方公共団体からの受託事業収益	341,585	
2 国又は地方公共団体以外からの受託事業収益	24,578	366,164
VII 外部資金導入研究収益		
1 外部資金導入研究収益	31,972	
2 受託研究収益	9,203	41,176
VIII 科学研究費間接経費収益		
		149
IX 財務収益		
1 預金利息		83
2 為替差益		346
X 雑益		
1 出向職員給与費負担金収益	4,200	
2 その他の雑益	672	4,872
XI 資産見返勘定戻入		
1 資産見返運営費交付金戻入	1,146,783	
2 資産見返補助金等戻入	46,957	
3 資産見返寄附金戻入	5,451	
4 資産見返物品受贈額戻入	403	1,199,596
経常収益 合計		8,123,785
経常利益		4,586
臨時損失		
I 固定資産除却損		1,425
臨時利益		
I 運営費交付金収益		
1 標準運営費交付金収益	73,918	
2 特定運営費交付金収益	1,436,683	1,510,602
II 固定資産売却益		
		169
III 貸倒引当金戻入		
		2
IV 資産見返運営費交付金戻入		
		1,425
V 資産見返物品受贈額戻入		
		0
当期純利益		1,515,361
目的積立金取崩額		755
当期総利益		1,516,117

キャッシュ・フロー計算書 (2020年4月1日～2021年3月31日)

(単位：千円)

I	業務活動によるキャッシュ・フロー	
1	人件費支出	△ 3,312,055
2	その他の業務支出	△ 3,670,105
3	補助金等の返還金支出	△ 115
4	運営費交付金収入	7,377,869
5	受託収入	401,667
6	手数料収入	334,923
7	その他の事業収入	174,135
8	補助金等収入	94,789
	小計	1,401,107
9	利息及び配当金の受取額	83
	業務活動によるキャッシュ・フロー	1,401,190
II	投資活動によるキャッシュ・フロー	
1	定期預金の払戻による収入	500,000
2	有形固定資産の取得による支出	△ 800,253
3	有形固定資産の売却による収入	169
4	無形固定資産の取得による支出	△ 44,130
5	保証金の返還による収入	405
	投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 343,808
III	資金に係る換算差額	346
IV	資金増加額	1,057,728
V	資金期首残高	3,339,269
VI	資金期末残高	4,396,998

利益の処分に関する書類

(単位：千円)

I 当期末処分利益		
当期総利益		1,516,117
II 積立金振替額		
前中期目標期間繰越積立金	19,576	
目的積立金	<u>102,920</u>	
積立金振替額 合計		<u>122,497</u>
III 利益処分量		
積立金		<u><u>1,638,614</u></u>

行政サービス実施コスト計算書

(2020年4月1日～2021年3月31日)

(単位：千円)

I 業務費用

1 損益計算書上の費用

(1) 業務費	4,972,732		
(2) 一般管理費	3,145,160		
(3) 雑損	1,306		
(4) 臨時損失	1,425		
	8,120,624		8,120,624

2 (控除) 自己収入等

(1) 手数料収益	△ 328,936		
(2) 使用料収益	△ 169,134		
(3) 受講料収益	△ 3,430		
(4) 指導事業収益	△ 783		
(5) 受託事業収益	△ 366,164		
(6) 外部資金導入研究収益	△ 41,176		
(7) 財務収益	△ 430		
(8) 雑益	△ 4,872		
(9) 資産見返寄附金戻入	△ 5,451		
(10) 臨時利益	△ 172		
	△ 920,553		△ 920,553

業務費用 合計 7,200,071

II 損益外減価償却相当額 675,271

III 引当外賞与増加見積額 6,753

IV 引当外退職給付増加見積額 △ 106,945

V 機会費用

1 国又は地方公共団体財産の無償又は減額された使用料による貸借取引の機会費用	365,722		
2 地方公共団体出資の機会費用	33,662		
	399,384		399,384

VI 行政サービス実施コスト 8,174,534

(重要な会計方針)

- 1 運営費交付金収益の計上基準
業務達成基準を採用しております。
また、業務の進行状況と運営費交付金の対応関係が明確である活動を除く管理部門の活動については期間進行基準を採用しております。
- 2 減価償却の会計処理方法
 - (1) 有形固定資産
定額法を採用しております。
耐用年数については、法人税法上の耐用年数を基準としていますが、主な資産の耐用年数は以下のとおりになっております。

建物	3年～50年
構築物	10年～50年
機械装置	6年～12年
車両運搬具	3年～4年
工具器具備品	2年～10年

特定の償却資産（地方独立行政法人会計基準 第87）の減価償却相当額については、損益外減価償却累計額として資本剰余金から控除しております。
 - (2) 無形固定資産
定額法を採用しております。
耐用年数は法人税法上の耐用年数を基準としていますが、法人内利用のソフトウェアについては、法人内における利用可能期間（5年）で償却を実施しております。
- 3 引当金の計上基準
 - (1) 退職給付に係る引当金及び見積額の計上基準
退職一時金については運営費交付金により財源措置がなされるため、退職給付に係る引当金は計上しておりません。
また、行政サービス実施コスト計算書における引当外退職給付増加見積額は、当事業年度末に在職する役職員について、当事業年度末の退職給付見積額から前事業年度末の退職給付見積額を控除した額から、退職者に係る前事業年度末の退職給付見積額相当額を控除して計算しております。
 - (2) 賞与に係る引当金及び見積額の計上基準
賞与については翌期以降の運営費交付金により財源措置がなされるため、賞与に係る引当金は計上しておりません。
なお、行政サービス実施コスト計算書における引当外賞与増加見積額は、当事業年度末の引当外賞与見積額から前事業年度末の同見積額を控除した額を計上しております。
 - (3) 貸倒引当金の計上基準
原則前納のため、一般債権については貸倒引当金を計上しておりません。貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。
- 4 たな卸資産の評価基準及び評価方法
実験用試薬（薬品）
個別法による低価法を採用しております。
- 5 外貨建資産及び負債の本邦通貨への換算基準
外貨建金銭債権債務は、当事業年度末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。
- 6 行政サービス実施コスト計算書における機会費用の計上方法
 - (1) 国又は地方公共団体の財産の無償又は減額された使用料による貸借取引の機会費用
東京都行政財産使用条例に基づき使用料を算定しております。
 - (2) 地方公共団体出資の機会費用の計算に使用した利率
決算日における新発10年国債の利回りである0.120%で計算しております。
- 7 消費税等の会計処理
消費税及び地方消費税の会計処理は、税込方式によっております。
- 8 財務諸表及び附属明細書の表示単位
千円未満切り捨てにより表示しております。

(注記事項)

1 貸借対照表関係

- (1) 運営費交付金から充当されるべき退職給付見積額 1,941,815 千円
(東京都からの派遣職員に対する退職給付見積額は上記金額から除いております。)
- (2) 運営費交付金から充当されるべき賞与見積額 205,954 千円

2 キャッシュ・フロー計算書関係

- (1) 資金の期末残高の貸借対照表表示科目別の内訳
2021年3月31日
- | | |
|--------|---------------------|
| 現金及び預金 | 4,396,998 千円 |
| 定期預金 | - 千円 |
| 資金期末残高 | <u>4,396,998 千円</u> |

3 行政サービス実施コスト計算書関係

- (1) 引当外賞与増加見積額の中には、東京都からの派遣職員に係るものが△330千円含まれております。
- (2) 引当外退職給付増加見積額の中には、東京都からの派遣職員に係るものが10,281千円含まれております。
- (3) 各庁舎の帰属については以下のとおりであります。
- | | |
|------------------|----------------------------|
| 本部 | 出資財産 |
| 城東支所 | 東京都行政財産の使用許可(無償) |
| 墨田支所 | 国際ファッションセンター(株)との賃貸借契約(有償) |
| 城南支所 | 東京都行政財産の使用許可(無償) |
| 多摩テクノプラザ | 東京都との賃貸借契約(普通財産・無償) |
| バンコク支所 | タイ王国プラスチック協会との賃貸借契約(有償) |
| DX推進センター | (株)東京テレポートセンターとの賃貸借契約(有償) |
| ものづくりベンチャー育成事業拠点 | (株)東京テレポートセンターとの賃貸借契約(有償) |

4 固定資産の減損会計関係

該当事項はありません。

5 退職給付関係

採用している退職給付制度の概要

役員は、地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター役員退職手当規程に基づき給付しております。
職員は、地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター職員退職手当規程に基づき給付しております。

6 重要な債務負担行為

(単位：千円)

契約内容	契約額	翌期以降
本部建物総合管理委託	825,778	825,778
技術支援事業管理システム構築業務委託	323,400	157,300
総務システム構築業務委託	311,173	254,633
DX推進センター(テレコムセンタービル東棟)の賃借	290,830	278,712
財務会計システム構築業務委託	167,200	156,200

7 金融商品関係

(1) 金融商品の状況に関する事項

当法人は、資金運用については地方独立行政法人法第43条の規定に基づき、預金、国債、地方債及び政府保証債等に限定しております。
資金運用にあたっては内部規程に基づく資金管理計画に従って、現状では、預金及び地方債により運用しております。

(2) 金融商品の時価等に関する事項

期末日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

	貸借対照表計上額(注1)	時価(注1)	差額(注1)
(1) 現金及び預金	4,396,998	4,396,998	-
(2) 未収入金	174,804	174,804	-
(3) 未払金	(2,381,044)	(2,381,044)	-

(注1) 負債に計上されているものは、()で示しております。

(注2) 金融商品の時価の算定方法

(1) 現金及び預金

現金及び預金は、短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(2) 未収入金

未収入金は、短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 未払金

未払金は、短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

8 資産除去債務関係

(1) 墨田支所

国際ファッションセンター(株)との賃貸借契約に基づき、退去時における原状回復に係る債務を有しておりますが第3期中期目標及び中期計画において庁舎の移転は予定されておられません。
移転等は当法人の裁量だけでなく、東京都をはじめとする各関係団体の意思を考慮して判断されることになるため、現時点で退去の時期が決定することができず、資産除去債務を合理的に見積もることができません。
そのため、当該債務に見合う資産除去債務を計上していません。

(2) 多摩テクノプラザ、城東支所及び城南支所

東京都との賃貸借契約及び行政財産使用許可に基づき、退去時における原状回復に係る債務を有しておりますが第3期中期目標及び中期計画において庁舎の移転は予定されておられません。
移転等は当法人の裁量だけでなく、東京都をはじめとする各関係団体の意思を考慮して判断されることになるため、現時点で退去の時期が決定することができず、資産除去債務を合理的に見積もることができません。
そのため、当該債務に見合う資産除去債務を計上していません。

(3) DX推進センター、ものづくりベンチャー育成事業拠点

(株)東京テレポートセンターとの賃貸借契約に基づき、退去時における原状回復に係る債務を有しておりますが第3期中期目標及び中期計画において庁舎の移転は予定されておられません。
移転等は当法人の裁量だけでなく、東京都をはじめとする各関係団体の意思を考慮して判断されることになるため、現時点で退去の時期が決定することができず、資産除去債務を合理的に見積もることができません。
そのため、当該債務に見合う資産除去債務を計上していません。

附 属 明 細 書

(1) 固定資産の取得及び処分並びに減価償却費（「第87 特定の償却資産の減価に係る会計処理」による損益外減価償却相当額も含む。）の明細

(単位：千円)

資産の種類	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	減価償却累計額		差引 当期末残高	摘要	
						当期償却額			
有形固定資産 (償却費損益内)	建物	5,621,749	222,739	-	5,844,489	4,296,420	444,144	1,548,069	
	構築物	71,010	-	-	71,010	13,846	1,420	57,163	
	機械装置	25,265	-	513	24,751	24,751	-	0	
	車両運搬具	13,367	-	-	13,367	13,367	-	0	
	工具器具備品	16,229,937	1,242,666	153,638	17,318,965	15,045,403	690,107	2,273,562	
	図書	35,242	1,256	10	36,489	-	-	36,489	
計	21,996,572	1,466,663	154,162	23,309,073	19,393,789	1,135,672	3,915,283		
有形固定資産 (償却費損益外)	建物	13,723,229	-	-	13,723,229	4,858,103	532,535	8,865,125	
	構築物	76,633	-	-	76,633	43,440	4,739	33,192	
	工具器具備品	1,679,092	226,358	-	1,905,450	1,429,634	137,996	475,816	
	計	15,478,954	226,358	-	15,705,312	6,331,178	675,271	9,374,134	
非償却資産	土地	14,200,000	-	-	14,200,000	-	-	14,200,000	
	計	14,200,000	-	-	14,200,000	-	-	14,200,000	
有形固定資産 合計	土地	14,200,000	-	-	14,200,000	-	-	14,200,000	
	建物	19,344,979	222,739	-	19,567,718	9,154,524	976,680	10,413,194	(注1)
	構築物	147,643	-	-	147,643	57,287	6,159	90,355	
	機械装置	25,265	-	513	24,751	24,751	-	0	
	車両運搬具	13,367	-	-	13,367	13,367	-	0	
	工具器具備品	17,909,029	1,469,024	153,638	19,224,415	16,475,037	828,104	2,749,378	(注1)
	図書	35,242	1,256	10	36,489	-	-	36,489	
計	51,675,527	1,693,021	154,162	53,214,386	25,724,968	1,810,943	27,489,417		
無形固定資産	特許権	182,823	33,065	6,492	209,396	102,479	22,531	106,916	
	特許権仮勘定	109,849	47,673	39,065	118,456	-	-	118,456	
	商標権	4,034	1,886	-	5,920	2,602	483	3,318	
	実用新案権	1,686	-	165	1,521	1,521	-	-	
	意匠権	2,607	2,828	-	5,435	1,506	534	3,928	
	電話加入権	680	-	-	680	-	-	680	
	ソフトウェア	308,554	-	-	308,554	193,445	40,386	115,109	
	ソフトウェア仮勘定	-	233,640	-	233,640	-	-	233,640	
計	610,235	319,093	45,723	883,606	301,555	63,935	582,050		
投資その他の 資産	敷金・保証金	148,973	-	405	148,567	-	-	148,567	
	計	148,973	-	405	148,567	-	-	148,567	
固定資産 合計	52,434,736	2,012,114	200,291	54,246,559	26,026,523	1,874,879	28,220,035		

(注1) 当期増加額は、資産の取得等によるものであり、主なものは、次のとおりです。

工具器具備品	高速通信評価システム	290,730 千円
	イメージング質量顕微鏡	165,841 千円
	高速X線CT	159,500 千円
	5G NR機器評価装置	132,000 千円
建物	ローカル5Gラボ環境構築工事	191,990 千円

(2) たな卸資産の明細

(単位：千円)

種類	期首残高	当期増加額		当期減少額		期末残高	摘要
		当期購入・ 製造・振替	その他	払出・振替	その他		
実験用試薬	28,269	28,443	-	28,269	-	28,443	
計	28,269	28,443	-	28,269	-	28,443	

(3) 有価証券の明細

該当事項はありません。

(4) 長期貸付金の明細

該当事項はありません。

(5) 長期借入金の明細

該当事項はありません。

(6) 引当金の明細

(単位：千円)

区分	期首残高	当期増加額	当期減少額		期末残高	摘要
			目的使用	その他		
貸倒引当金	400	186	586	-	-	
計	400	186	586	-	-	

(7) 資産除去債務の明細

該当事項はありません。

(8) 保証債務の明細

該当事項はありません。

(9) 資本金及び資本剰余金の明細

(単位：千円)

区分		期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	摘要
資本金	地方公共団体出資金	28,051,831	-	-	28,051,831	
	計	28,051,831	-	-	28,051,831	
資本剰余金	資本剰余金	1,775,559	226,358	-	2,001,917	
	計	1,775,559	226,358	-	2,001,917	
	損益外減価償却累計額	△ 5,655,907	△ 675,271	-	△ 6,331,178	
	差引計	△ 3,880,348	△ 448,913	-	△ 4,329,261	

(10) 積立金の明細及び目的積立金の取崩しの明細

(10)-1 積立金の明細

(単位：千円)

区 分	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	摘 要
中小企業支援・研究開発の資質向上及び組織運営・施設・整備の改善目的積立金	319,214	10,820	227,113	102,920	増加理由：2019年度の利益処分によるもの 減少理由：2020年度機器整備等による固定資産取得額の取崩
前中期目標期間繰越積立金	19,576	-	-	19,576	
積立金	346,061	66,025	-	412,087	増加理由：2019年度の利益処分によるもの

(10)-2 目的積立金の取崩しの明細

(単位：千円)

区分	金額	摘要
中小企業支援・研究開発の資質向上及び組織運営・施設・整備の改善目的積立金	755	文房具等管理運営に関する経費
合計	755	

(11) 運営費交付金債務及び当期振替等の明細

(11)-1 運営費交付金債務の増減の明細

(単位：千円)

期首残高	交付金 当期交付額	当期振替額						期末残高
		運営費交付金収益 (注1)	資産見返運営費 交付金	ソフトウェア仮勘定 見返運営費交付金	特許権仮勘定見 返運営費交付金	資本剰余金	小計	
1,822,338	7,377,869	7,519,713	1,399,180	233,640	47,673	-	9,200,207	-

(注1) 臨時利益に計上した、会計基準第79第5項による振替額1,510,602千円を含んでおります。

(11)-2 運営費交付金債務の当期振替額及び主な用途の明細

1 運営費交付金収益への振替額及び主な用途の明細

(単位：千円)

区分	運営費交付金収益	運営費交付金の主な用途	
		費用	主な用途
業務達成基準による振替額	技術支援	579,399	624,606 人件費：453,959 役務費：106,033 消耗品費：54,417 その他：10,197
	製品開発支援	276,323	272,198 人件費：138,525 役務費：81,723 消耗品費：47,031 その他：4,919
	研究開発	890,941	890,941 人件費：656,648 役務費：84,010 消耗品費：115,579 その他：34,704
	産業サービス	421,368	421,372 人件費：282,094 役務費：87,987 消耗品費：5,744 その他：45,547
その他	1,577,166	1,577,166 人件費：714,494 役務費：421,330 消耗品費：145,067 その他：296,275	
期間進行基準による振替額	2,263,911	2,217,351	人件費：727,290 役務費：619,979 消耗品費：72,028 その他：798,054
費用進行基準による振替額	-	-	費用進行基準を採用した業務はなし
会計基準第79条第5項に基づく振替額	1,510,602	-	
合計	7,519,713	6,003,636	

2 資産見返運営費交付金、建設仮勘定見返運営費交付金、特許権仮勘定見返運営費交付金及び資本剰余金への振替額並びに主な用途の明細

(単位：千円)

セグメント	資産見返運営費交付金への振替		ソフトウェア仮勘定見返運営費交付金への振替額		特許権仮勘定見返運営費交付金への振替額		資本剰余金への振替	
	振替額	主な用途	振替額	主な用途	振替額	主な用途	振替額	主な用途
技術支援	106,562	建物付属設備： 4,125 工具器具備品： 102,437	-		-		-	
製品開発支援	72,498	建物付属設備： 4,125 工具器具備品： 68,373	-		-		-	
研究開発	72,196	工具器具備品： 72,196	-		-		-	
産業サービス	1,012	図書： 1,012	-		37,965	特許権仮勘定： 37,965	-	
その他	1,136,690	建物付属設備： 211,299 工具器具備品： 925,146 図書： 243	233,640	建設仮勘定： 233,640	9,707	特許権仮勘定： 9,707	-	
法人共通	10,219	建物付属設備： 3,190 工具器具備品： 7,029	-		-		-	
合計	1,399,180		233,640		47,673		-	

(11)-3 運営費交付金債務残高の明細

(単位：千円)

運営費交付金債務残高	使用見込み
業務達成基準を採用した業務に係る分	-
期間進行基準を採用した業務に係る分	-
費用進行基準を採用した業務に係る分	- 費用進行基準を採用した業務はなし
計	-

(12) 運営費交付金以外の設立団体等からの財源措置の明細

補助金等の明細

(単位：千円)

区分	期首残高	当期交付額	左の会計処理内訳		期末残高	摘要
			資産見返補助金等	収益計上		
国立研究開発法人 科学技術振興機構 研究成果展開事業	-	2,600	599	1,619	380	
国立研究開発法人 日本医療研究開発機構 医薬品等規制調和・評価 研究事業	-	650	-	638	11	
国立研究開発法人 日本医療研究開発機構 橋渡し研究戦略的 推進プログラム	-	1,760	-	1,760	-	
国立研究開発法人 日本医療研究開発機構 医療分野研究成果展開事業	-	2,015	-	2,013	1	
公益財団法人 精密測定技術振興財団 調査・研究事業	-	2,300	1,698	601	-	
公益財団法人天田財団 研究助成事業	3,407	-	-	1,858	1,549	

区分	期首残高	当期交付額	左の会計処理内訳		期末残高	摘要
			資産見返補助金等	収益計上		
一般社団法人日本機械学会 提案公募型研究事業	-	310	-	310	-	
一般社団法人 日本非破壊検査協会 研究助成事業	-	1,000	-	841	158	
クボタ若手研究者 研究奨励制度	-	1,000	828	99	72	
関東経済産業局 戦略的基盤技術 高度化支援事業	-	31,643	19,669	11,974	-	
国立研究開発法人 新エネルギー・産業 技術総合開発機構 ベンチャー企業等による 新エネルギー技術革新 支援事業	-	8,022	-	8,022	-	
国立研究開発法人 新エネルギー・産業 技術総合開発機構 海洋生分解性プラスチック の社会実装に向けた 技術開発事業	-	2,420	-	2,232	187	
計	3,407	53,721	22,795	31,972	2,361	

(13) 役員及び職員の給与の明細

(単位：千円、人)

区分	報酬又は給与		退職給付	
	支給額	支給人員	支給額	支給人員
役員	(917) 45,277	(2) 3	(-) 4,680	(-) 1
職員	(117,538) 2,472,236	(53) 354	(-) 126,321	(-) 15
合計	(118,456) 2,517,513	(55) 357	(-) 131,001	(-) 16

(注1) 役員に対する報酬等の基準及び職員に対する給与及び退職手当の支給基準は以下の諸規程に基づいています。

- ①地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター役員給与規程
- ②地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター役員退職手当規程
- ③地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター職員給与規程
- ④地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター職員退職手当規程
- ⑤地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター任期付職員給与規程
- ⑥地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター任期付職員退職手当規程
- ⑦地方独立行政法人東京都立産業技術研究センターワイドキャリアスタッフ職員給与規程

(注2) 支給人員は、年間平均支給人員数を記載しています。

(注3) () は非常勤の役員及び職員（臨時職員）に対する支給額及び人数を外数で記載しています。

(注4) 上記明細は給与、賞与、諸手当の合計額で、法定福利費は含まれていません。

(注5) 上記明細には人材派遣に係る人件費は含まれていません。

(14) 科学研究費補助金等の明細

(単位：千円)

種目	当期受入	件数	摘要
基盤研究(A)	(3,330) 999	3	
基盤研究(B)	(3,550) 1,065	5	
基盤研究(C)(基金分)	(13,634) 4,090	24	
挑戦的萌芽研究(基金分)	(2,600) 780	2	
若手研究(基金分)	(23,700) 7,110	21	
研究活動スタート支援	(1,100) 330	1	
合計	(47,914) 14,374	56	

- (1) 当期受入には、間接経費相当額を記載し、直接経費相当額については、外数として()に記載しております。
 なお、他機関へ送金する分担金相当額を除き、他機関から受領する分担金相当額を含めております。
- (2) 件数には、当期受入のうち、間接経費が交付された件数を記載しております。

(15) 開示すべきセグメント情報

(単位：千円)

	技術支援	製品開発支援	研究開発	産業サービス	その他	計	法人共通	合計
I 事業費用、事業収益及び事業損益								
事業費用								
業務費								
人件費	819,450	266,308	722,737	329,839	206,932	2,345,269	-	2,345,269
減価償却費	160,738	102,342	127,818	26,516	462,640	880,055	-	880,055
業務費	256,264	221,400	245,206	158,609	865,926	1,747,407	-	1,747,407
一般管理費								
人件費	-	-	-	-	33,041	33,041	993,393	1,026,435
減価償却費	-	-	-	-	-	-	319,552	319,552
その他の一般管理費	-	-	-	-	-	-	1,800,479	1,800,479
計	1,236,453	590,050	1,095,763	514,966	1,568,540	5,005,774	3,113,424	8,119,198
事業収益								
運営費交付金収益								
標準運営費交付金収益	590,172	273,099	806,471	413,255	-	2,082,999	2,348,944	4,431,944
特定運営費交付金収益	126,959	40,092	119,973	16,705	1,099,951	1,403,683	173,483	1,577,166
手数料収益	312,591	15,244	-	-	1,099	328,936	-	328,936
使用料収益	-	163,396	-	1,083	4,543	169,024	110	169,134
受講料収益	-	-	-	3,430	-	3,430	-	3,430
指導事業収益	783	-	-	-	-	783	-	783
受託事業収益	-	-	-	53,906	305	54,211	311,952	366,164
外部資金導入研究収益	-	-	41,176	-	-	41,176	-	41,176
財務収益	-	-	-	-	-	-	430	430
雑益	-	-	173	64	-	237	4,634	4,872
科研費間接経費収益	-	-	149	-	-	149	-	149
資産見返勘定戻入	160,732	102,342	127,813	26,516	462,640	880,044	319,552	1,199,596
計	1,191,240	594,175	1,095,757	514,962	1,568,540	4,964,676	3,159,108	8,123,785
事業損益	△45,212	4,125	△5	△3	-	△41,097	45,683	4,586
II 臨時損益等								
臨時損失								
固定資産除却損	117	0	13	1,295	-	1,425	-	1,425
計	117	0	13	1,295	-	1,425	-	1,425
臨時利益								
標準運営費交付金収益	-	-	45,198	28,720	-	73,918	-	73,918
特定運営費交付金収益	30,657	9,681	28,971	4,033	1,265,647	1,338,992	97,691	1,436,683
固定資産売却益	0	153	16	-	-	169	-	169
貸倒引当金戻入	-	-	-	-	-	-	2	2
資産見返運営費交付金戻入	117	0	13	1,295	-	1,425	-	1,425
資産見返受贈額戻入	-	0	0	-	-	0	-	0
計	30,775	9,835	74,199	34,049	1,265,647	1,414,506	97,693	1,512,200
当期純損益	△14,554	13,960	74,180	32,750	1,265,647	1,371,983	143,377	1,515,361
目的積立金取崩額	-	-	-	-	-	-	755	755
当期総損益	△14,554	13,960	74,180	32,750	1,265,647	1,371,983	144,133	1,516,117

	技術支援	製品開発支援	研究開発	産業サービス	その他	計	法人共通	合計
III 行政サービス実施コスト								
業務費用								
損益計算書上の費用	1,236,595	590,050	1,095,776	516,261	1,568,540	5,007,224	3,113,400	8,120,624
(控除)自己収入	△ 313,375	△ 178,838	△ 46,774	△ 58,485	△ 5,948	△ 603,422	△ 317,130	△ 920,553
業務費用合計	923,219	411,212	1,049,001	457,776	1,562,592	4,403,801	2,796,269	7,200,071
損益外減価償却相当額	27,008	82,531	22,655	-	-	132,196	543,074	675,271
引当外賞与増加見積額	1,647	526	1,452	655	479	4,761	1,992	6,753
引当外退職給付増加見積額	△ 26,094	△ 8,341	△ 22,993	△ 10,373	△ 7,593	△ 75,396	△ 31,548	△ 106,945
機会費用								
国又は地方公共団体財産の無償又は減額された使用料による賃貸取引の機会費用	-	-	-	-	-	-	365,722	365,722
地方公共団体出資の機会費用	-	-	-	-	-	-	33,662	33,662
行政サービス実施コスト	925,780	485,929	1,050,116	448,057	1,555,478	4,465,362	3,709,172	8,174,534
IV 総資産								
土地	-	-	-	-	-	-	14,200,000	14,200,000
建物	280,421	117,954	-	19,085	651,796	1,069,257	9,343,937	10,413,194
構築物	-	-	-	-	-	-	90,355	90,355
機械装置	0	0	0	-	-	0	-	0
車両運搬具	-	-	-	-	-	-	0	0
工具器具備品	495,329	383,752	359,860	1,359	1,452,189	2,692,491	56,886	2,749,378
ソフトウェア仮勘定	-	-	-	-	233,640	233,640	-	233,640
現金及び預金	-	-	-	-	-	-	4,396,998	4,396,998
その他	61,810	2,461	131,177	260,938	128,864	585,253	158,850	744,104
計	837,561	504,167	491,037	281,384	2,466,490	4,580,642	28,247,028	32,827,671

(注1)セグメントの区分は第3期中期計画における一定の事業等のまとまりごとの区分に基づいております。

(注2)各セグメントの業務内容

技術支援 : 主に中小企業に対し、職員の専門的な知識を活用し、来所、電話、電子メール等による技術相談や、導入した機器を活用し、高品質、高性能、高安全性など付加価値の高いものづくりを支援する依頼試験を行う。

製品開発支援 : 主に中小企業では導入が困難な測定機器や分析機器を整備し、中小企業における新製品・新技術開発のために行う機器利用、自社製品を開発する際の上流工程の技術課題解決に対応するためオーダーメイド開発支援

研究開発 : 主に機械、電気・電子、情報、化学、バイオ等の基盤技術分野に対する基盤研究、基盤研究で得られた研究成果を効率的かつ効果的に実用化へつなげていくため、独自の技術やノウハウを有し意欲のある中小企業や業界団体、大学、研究機関と協力して行う共同研究、技術開発の要素が大きい経済産業省や文部科学省などの提案公募型事業へ積極的に応募し、採択を目指すとともに、採択された研究を行う提案公募型研究を行う。

産業サービス : 主に公益財団法人東京都中小企業振興公社(以下、「中小企業振興公社」という。)の経営支援部門等他の機関との連携を活用して、セミナーの開催や企業への実地技術支援等を行う技術経営支援、産学公連携の拠点となる「東京イノベーションハブ」にて、中小企業と大学、学協会、研究機関との連携を促進するセミナーや交流会、展示会を行う産業交流、新技術、産業動向、国際化対応などに関するセミナーや実践に役立つ講習会の開催により、中小企業の新製品・新サービスの創出を担う人材育成を進めるとともに、本部の開設に伴い整備した機器を活用し、研究開発や製造技術の高度化を担う中小企業の産業人材の育成を支援する技術セミナー・講習会、東京都、区市町村、中小企業振興公社、商工会議所、商工会などの支援機関等が実施する講演会、イベント・展示会への参加を通じ、都産技研の事業を積極的にPRし利用拡大につなげる情報発信

その他 : 主に特定運営費交付金にて実施される都内中小企業の工業製品の出張放射線検査、中小企業の5G・IoT・ロボット普及促進事業、航空機産業への参入支援事業、障害者スポーツ研究開発推進事業、バイオ基盤技術事業、プラスチック代替素材事業、ものづくりベンチャー事業、都政課題解決プロジェクト、情報システムの整備(総務財務システム)等及び共済組合負担金、退職手当の支払いを行う。

法人共通 : 上記以外の業務を行う。

(注3)事業費用のうち、法人共通に含めた配賦不能事業費用は、3,113,424千円であり、その主なものは管理部門に係る費用であります。

(注4)事業収益のうち、法人共通に含めた配賦不能事業収益は、3,159,108千円であり、その主なものは管理部門に係る収益であります。

(注5)総資産のうち法人共通の項目に含めた全社資産は、主に現物出資資産、現預金及び管理部門に係る資産であります。

(16) 上記以外の主な資産、負債、費用及び収益の明細

(16) -1 現金及び預金の明細

(単位：千円)

区分	金額
現金	988
預金	4,396,010
合計	4,396,998

2020事業年度

決算報告書

第15期

自 2020年 4月 1日

至 2021年 3月31日

2020年度 決算報告書

地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター

(単位：百万円)

区分	技術支援				製品開発支援				研究開発				産業サービス			
	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考
収入																
運営費交付金	1,358	815	△ 542	(注1)	88	385	297	(注1)	834	1,043	209	(注1)	398	426	28	(注5)
施設整備費補助金	-	-	-		-	-	-		-	-	-		-	-	-	
自己収入	430	343	△ 86		214	178	△ 35		130	64	△ 65		176	59	△ 116	
事業収入	400	313	△ 86	(注2)	214	178	△ 35	(注2)	-	-	-		100	44	△ 55	(注2)
補助金収入	30	30	-		-	-	-		30	-	△ 30		-	-	-	
外部資金研究費等	-	0	0		-	-	-		100	64	△ 35	(注4)	-	-	-	
その他収入	-	0	0		-	0	0		-	0	0		76	15	△ 60	
積立金取崩	11	197	186	(注3)	12	-	△ 12		12	21	9	(注3)	-	-	-	
収入 計	1,799	1,356	△ 442		314	563	249		976	1,130	154		574	485	△ 88	
支出																
業務費	1,799	1,410	△ 388		314	560	246		976	1,085	109		574	528	△ 45	
試験研究経費	969	590	△ 378	(注1)	59	293	234	(注1)	196	298	102	(注1)	128	198	70	(注5)
外部資金研究費等	-	0	0		-	-	-		100	64	△ 35	(注4)	-	-	-	
東京緊急対策	-	-	-		-	-	-		-	-	-		-	-	-	
ロボット産業活性化	-	-	-		-	-	-		-	-	-		-	-	-	
役職員人件費	830	819	△ 10		255	266	11		680	722	42		446	329	△ 116	(注6)
一般管理費	-	-	-		-	-	-		-	-	-		-	-	-	
支出 計	1,799	1,410	△ 388		314	560	246		976	1,085	109		574	528	△ 45	
収入 - 支出	-	△ 53	△ 53		-	3	3		-	45	45		-	△ 42	△ 42	

2020年度 決算報告書

地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター

(単位：百万円)

区分	法人共通				その他				合計			
	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考
収入												
運営費交付金	2,215	2,530	315	(注7)	192	2,176	1,984	(注10)	5,085	7,377	2,292	
施設整備費補助金	10	-	△10	(注8)	-	-	-		10	-	△10	
自己収入	-	317	317		300	5	△294		1,250	970	△280	
事業収入	-	0	0		-	5	5		714	542	△171	
補助金収入	-	-	-		-	-	-		60	30	△30	
外部資金研究費等	-	-	-		-	-	-		100	64	△35	
その他収入	-	317	317	(注9)	300	-	△300	(注9)	376	333	△43	
積立金取崩	-	7	7		-	-	-		35	227	192	
収入 計	2,225	2,855	630		493	2,182	1,689		6,381	8,575	2,194	
支出												
業務費	898	993	95		193	2,485	2,292		4,754	7,063	2,309	
試験研究経費	190	-	△190	(注5)	-	2,241	2,241	(注10)	1,542	3,623	2,081	
外部資金研究経費等	-	-	-		-	-	-		100	64	△35	
東京緊急対策	-	-	-		12	4	△7		12	4	△7	
ロボット産業活性化	-	-	-		-	-	-		-	-	-	
役員人件費	708	993	285	(注7)	181	239	58	(注10)	3,101	3,371	271	
一般管理費	1,327	1,817	490	(注9)	300	-	△300	(注9)	1,627	1,817	190	
支出 計	2,225	2,811	586		493	2,485	1,992		6,381	8,881	2,500	
収入 - 支出	-	44	44		-	△303	△303		-	△306	△306	(注11)

○予算と決算の差異等について

- (注1) 技術支援に機器整備・保守校正のための予算が組み込まれておりますが、決算では実際の使用割合に応じて配分しているため、差額が発生しております。
- (注2) 新型コロナウイルス感染症の影響を受け、実績が例年水準を下回ったため、予算金額に比して、決算金額が少額となっております。
- (注3) 高速X線CT、走査電子顕微鏡の購入により、目的積立金218百万円を取崩したため、予算金額に比して、決算金額が増額となっております。
- (注4) 今年度において、認可された外部資金は64百万円であったため、予算金額に比して、決算金額が35百万円少額となっております。
- (注5) 予算では海外事務所等の経費を法人共通へ組み込んでいたが、決算では実態に合わせて産業サービスで計上しているため、差額が発生しております。
- (注6) 人件費は業務時間分析に基づき配賦しております。予算に対して実績の配賦率が低かったため、予算金額に比して、決算金額が少額となっております。
- (注7) 主にプロジェクト事業増加に伴い、管理部門の業務量も増加し、予算金額に比して、決算金額が増額となっております。
- (注8) 施設整備費補助金は、緊急的、臨時的な補修等に係る経費や災害復旧のために係る経費に備えて積み立てている予算ですが、本年度においては未執行のため、予算額に比して、決算金額が10百万円少額となっております。
- (注9) 業務達成基準採用に伴い、「地方独立行政法人会計基準及び地方独立行政法人会計基準注解 第79 3」に従い、建物維持管理受託を管理費として区分し、セグメントをその他から法人共通へ変更したため、法人共通とその他で予算と決算の間に入り繰りが発生しております。
- (注10) 主に中小企業の5G・IoT・ロボット普及促進事業、航空機産業への参入支援事業、障害者スポーツ研究開発推進事業、バイオ基盤技術事業、プラスチック代替素材事業、ものづくりベンチャー事業、都政課題解決プロジェクト、情報システムの整備(総務財務システム)事業の特定運営費交付金が交付されたことにより、予算額に比して、決算金額が増額となっております。
- (注11) 主に中小企業の5G・IoT・ロボット普及促進事業で2020年度の特定運営費交付金の収入1,180百万円に対して固定資産を含めた支出が1,544百万円だったため、差額がマイナスとなっております。同事業の昨年度末の運営費交付金残高が870百万円あるため、収支の差額はその残高を使用しております。

2020事業年度

事業報告書

第15期

自 2020年 4月 1日

至 2021年 3月31日

目 次

○ 地方独立行政法人東京都立産業技術研究センターの概要

- 1 設立目的および設立団体
- 2 業務内容
- 3 中期計画の取り組み目標
- 4 沿革
- 5 役員の状況
- 6 財務諸表の要約
- 7 財務情報
- 8 事業に関する説明
- 9 業務の根拠となる法律
- 10 組織
- 11 職員の状況
- 12 事業所の所在地
- 13 資本金の状況

○2020年度の事業概要

- I 住民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置
- II 業務運営の改善及び効率化に関する事項
- III 財務内容の改善に関する事項
- IV 予算（人件費の見積りを含む。）
- V 短期借入金の限度額
- VI 重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画
- VII 剰余金及び積立金の使途
- VIII その他業務運営に関する重要事項

地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター事業報告書

○ 地方独立行政法人東京都立産業技術研究センターの概要

1 設立目的および設立団体

地方独立行政法人東京都立産業技術研究センターは、産業技術に関する試験、研究、普及及び技術支援等を行うことにより、都内中小企業の振興を図り、もって都民生活の向上に寄与することを目的として、東京都が設立した。

2 業務内容

- ① 産業技術に係る試験、研究及び調査に関すること。
- ② 産業技術に係る普及、相談及び支援に関すること。
- ③ 試験機器等の設備及び施設の提供に関すること。
- ④ これらの業務に附帯する業務を行うこと。

3 中期計画の取り組み目標

- ① 研究開発活動による東京の成長産業支援
- ② プロダクトイノベーションの推進による開発型中小企業の支援
- ③ 中小企業の海外展開を支える技術支援
- ④ 多様な機関との交流連携の推進
- ⑤ 高度な産業人材の育成

4 沿革

- | | |
|----------|---|
| 1997年4月 | 東京都立工業技術センターと東京都立アイソトープ総合研究所が合併し、東京都立産業技術研究所を設置 |
| 2000年4月 | 東京都立産業技術研究所に東京都立繊維工業試験場を統合 |
| 2006年4月 | 東京都立産業技術研究所と城東地域中小企業振興センター、城南地域中小企業振興センター、多摩中小企業振興センターの技術部門を統合するとともに、地方独立行政法人へ移行し、地方独立行政法人東京都立産業技術研究センターを設置 |
| 2010年2月 | 八王子支所と多摩支所の機能を集約し、旧都立短大跡地（昭島市）に多摩テクノプラザを開設 |
| 2011年3月 | 駒沢支所を廃止 |
| 2011年10月 | 西が丘本部と旧駒沢支所の機能を集約し、臨海副都心青海地区に本部を開設 |
| 2015年4月 | タイ王国にバンコク支所を開設 |

2016年4月 東京ロボット産業支援プラザを全面オープン
 2018年10月 IoT支援サイトを開設
 2020年4月 ヘルスケア産業支援室（SUSCARE）開設
 2020年11月 DX推進センター開設

5 役員 の 状 況

役員 の 定 数 は、 地 方 独 立 行 政 法 人 東 京 都 立 産 業 技 術 研 究 セ ン タ ー 定 款 に よ り、 理 事 長 1 人、 理 事 2 人 以 内、 監 事 2 人 以 内

役 員 の 任 期 は 2 年。 再 任 さ れ る こ と が で き る。

役職・氏名	任期・担当	経歴
理事長 奥村 次徳	【任期】 2020年4月 ～2022年3月	1978年3月：東京大学大学院工学系研究科修了 1978年4月：東京都立大学工学部助教授 1981年7月：IBMワトソンリサーチセンター客員研究員 1989年4月：東京都立大学工学部教授 2005年4月：首都大学東京理工学系長 2006年4月：同 大学院理工学研究科長 2009年4月：同 都市教養学部 学部長 2011年4月：同 副学長 2015年5月：同 学長特任補佐、公立大学法人首都大学東京理事 2016年4月：(地独) 東京都立産業技術研究センター理事長
理事 長谷川 裕夫	【任期】 2019年4月 ～2021年3月 【担当】 開発本部	1978年3月：東京大学 理学部物理学科 卒業 1980年3月：同大学大学院 理学系研究科物理学専門課程修士課程 修了 1980年4月：工業技術院 機械技術研究所 基礎部 エネルギー課 1987年10月：同 エネルギー機械部 エネルギー変換課 主任研究官 2001年4月：(独法) 産業技術総合研究所 エネルギー利用研究部門 副研究部門長 2003年3月：同 企画本部 総括企画主幹 2006年4月：同 エネルギー技術研究部門 副研究部門長 2008年4月：同 エネルギー技術研究部門 研究部門長 2012年4月：同 つくばセンター 次長 2014年4月：同 関西センター 所長 2017年4月：(地独) 東京都立産業技術研究センター 理事

<p>理事 近藤 幹也</p>	<p>【任期】 2020年4月 ～2022年3月 【担当】 経営企画部、総務部、事業化支援本部</p>	<p>1985年3月：東京農工大学大学院 工学研究科製糸学専攻 修了 2000年9月：信州大学大学院 工学系研究科生物機能工学専攻博士後期課程 修了 1985年4月：東京都労働経済局繊維工業試験場編織技術部 2007年4月：(地独) 東京都立産業技術研究センター 総務部 情報システム課 上席研究員 2008年4月：同 経営企画本部 経営企画室 上席研究員 2010年2月：同 多摩テクノプラザ 総合支援課長 2012年4月：同 開発本部開発第二部長 (主席研究員) 2014年4月：同 多摩テクノプラザ所長 2015年4月：同 経営企画部長 2018年4月：同 理事</p>
<p>監事 (非常勤) 泉澤 俊一</p>	<p>【任期】 2020年10月 ～2021年度財務諸表承認日まで</p>	<p>1978年3月：東京経済大学 経営学部 卒業 1981年11月：監査法人朝日会計社 (現有限責任あずさ監査法人) 入社 2001年7月：有限責任あずさ監査法人代表社員 就任 2013年1月：泉澤公認会計士事務所 開所 2014年4月：学校法人早稲田大学パブリックサービス研究所 招聘研究員 就任 2019年10月：(地独) 東京都立産業技術研究センター 監事</p>
<p>監事 (非常勤) 大串 淳子</p>	<p>【任期】 2020年10月 ～2021年度財務諸表承認日まで</p>	<p>1984年3月：東京大学 教養学部 (国際関係論専攻) 卒業 1986年10月：ミラノ大学人文学部単年度コース履修 1998年4月：弁護士登録 2000年1月：渥美坂井法律事務所・外国法共同事業 入所 (2006年1月シニアパートナー 就任) 2000年10月：府中市情報公開審査会委員 2006年10月：法制審議会幹事 2015年5月：University of Michigan Law School (LL.M) 2017年12月：カリフォルニア州弁護士登録 2020年10月：(地独) 東京都立産業技術研究センター 監事</p>

6 財務諸表の要約

① 要約した財務諸表

(1) 貸借対照表

(単位：百万円)

資産の部	金額	負債の部	金額
固定資産	28,220	固定負債	4,495
有形固定資産	27,489	資産見返負債	4,495
無形固定資産	582	流動負債	2,558
投資その他の資産	148	未払金	2,381
流動資産	4,607	その他流動負債	177
現金及び預金	4,396	負債合計	7,054
その他流動資産	210	純資産の部	
		資本金	28,051
		資本剰余金	△4,329
		利益剰余金	2,050
		純資産合計	25,773
資産合計	32,827	負債純資産合計	32,827

(注) 金額欄の計数は、原則としてそれぞれ端数を切捨によって表示しているため、合計とは一致しないものがある。

(2) 損益計算書

(単位：百万円)

	金額
経常費用(A)	8,119
業務費	4,972
人件費	2,345
減価償却費	880
その他	1,747
一般管理費	3,145
人件費	1,026
減価償却費	319
その他	1,799
雑損	1

経常収益(B)	8,123
運営費交付金収益	6,009
手数料収益	328
使用料収益	169
受託事業収益	366
資産見返勘定戻入	1,199
その他	50
臨時損益(C)	1,510
目的積立金取崩額(D)	0
当期総利益(B-A+C+D)	1,516

(注)金額欄の計数は、原則としてそれぞれ端数を切捨によって表示しているため、合計とは一致しないものがある。

(3) キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	金額
I 業務活動によるキャッシュ・フロー(A)	1,401
人件費支出	△3,312
その他の業務支出	△3,670
運営費交付金収入	7,377
受託収入	401
手数料収入	334
その他の事業収入	174
補助金等収入	94
II 投資活動によるキャッシュ・フロー(B)	△343
III 資金に係る換算差額(C)	0
IV 資金増加額(D=A+B+C)	1,057
V 資金期首残高(E)	3,339
VI 資金期末残高(F=D+E)	4,396

(注)金額欄の計数は、原則としてそれぞれ端数を切捨によって表示しているため、合計とは一致しないものがある。

(4) 行政サービス実施コスト計算書

(単位：百万円)

	金額
I 業務費用	
損益計算書上の費用	8,120
(控除) 自己収入等	△920
(その他の行政サービス実施コスト)	
II 損益外減価償却相当額	675
III 引当外賞与増加見積額	6
IV 引当外退職給付増加見積額	△106
V 機会費用	399
VI 行政サービス実施コスト	8,174

(注) 金額欄の計数は、原則としてそれぞれ端数を切捨によって表示しているため、合計とは一致しないものがある。

②財務諸表の科目の説明

(1)貸借対照表

- 有形固定資産 : 土地、建物、構築物、機械装置、車両運搬具、工具器具備品、図書など地方独立行政法人が長期にわたって使用または利用する有形の固定資産
- 無形固定資産 : 特許権、特許権仮勘定(出願中のもの)、商標権、意匠権、電話加入権、ソフトウェア、ソフトウェア仮勘定(構築中のもの)など具体的な形態を持たない無形の固定資産
- 投資その他の資産 : 有形・無形固定資産以外の長期資産で、敷金等が該当
- 現金及び預金 : 現金、預金
- その他流動資産 : 未収入金、たな卸資産、前渡金、前払費用等、1年以内に費用、現金化できるもの(上記現金及び預金を除く)
- 資産見返負債 : 運営費交付金、補助金、寄付金等を財源として固定資産を取得した場合、取得時に資産と同額の負債を計上した額。(地方独立行政法人特有の勘定科目)
- 未払金 : 地方独立行政法人の通常の業務活動において発生した債務の未払額
- その他流動負債 : 預り補助金等、未払費用、前受金、預り金等1年以内に支払時期が到来する上記(未払金)以外の流動負債
- 資本金 : 地方公共団体からの出資金であり、地方独立行政法人の財産的基礎を構成するもの
- 資本剰余金 : 地方公共団体から交付された施設費や目的積立金などを財源として取得した資産で地方独立行政法人の財産的基礎を構成するもの
- 利益剰余金 : 地方独立行政法人の業務に関連して発生した剰余金の累計額

(2)損益計算書

- 経常費用
- 業務費 : 地方独立行政法人の業務に要した費用
- 人件費(業務費) : 給与、賞与、法定福利費等、地方独立行政法人の運営・管理を行う職員を除く職員等に要する経費
- 減価償却費(業務費) : 業務に要する固定資産の取得原価をその耐用年数にわたって費用として配分する経費
- その他(業務費) : 業務に要する経費(上記、人件費(業務費)、減価償却費(業

	務費)を除く)
一般管理費	: 地方独立行政法人の管理運営に要した費用
人件費(一般管理費)	: 給与、賞与、法定福利費等、地方独立行政法人の運営・管理を行う職員等に要する経費
減価償却費(一般管理費)	: 管理運営に要する固定資産の取得原価をその耐用年数にわたって費用として配分する経費
その他(一般管理費)	: 管理運営に要する経費(上記、人件費(一般管理費)、減価償却費(一般管理費)を除く)
経常収益	
運営費交付金収益	: 地方公共団体からの運営費交付金のうち、当期の収益として認識した額
手数料収益	: 依頼試験、オーダーメイド開発支援により得た収益
使用料収益	: 機器利用、施設使用、特許権等の知的所有権により得た収益
受託事業収益	: 東京都等から受託事業を受けたことにより得た収益
資産見返勘定戻入	: 運営費交付金、補助金、寄附金等で取得した固定資産にかかる減価償却費を計上した時に同時に同額だけ計上する収益で、損益を均衡させるための地方独立行政法人特有の勘定科目
その他(経常収益)	: 上記以外の経常収益
臨時損益	: 臨時損失(固定資産除却損等)と臨時利益(運営費交付金収益、固定資産除却損等に対応する資産見返勘定戻入等)を相殺した額

(3) キャッシュ・フロー計算書

業務活動によるキャッシュ・フロー	: 地方独立行政法人の通常の業務の実施に係る資金の状態を表し、サービスの提供等による収入、原材料、商品又はサービスの購入による支出、人件費支出等
人件費支出	: 地方独立行政法人の業務活動に要した人件費支出額
その他業務支出	: 地方独立行政法人の業務活動に要した支出額(上記人件費支出を除く)
運営費交付金収入	: 地方公共団体からの運営費交付金収入
受託収入	: 国、地方公共団体、その他外部機関より受託した事業収入
手数料収入	: 依頼試験やオーダーメイド開発支援により得た事業収入
その他事業収入	: 地方独立行政法人の業務活動により得た収入(上記の運営

費交付金収入、受託収入、手数料収入を除く)

- 補助金等収入 : 外部資金より得た収入
- 投資活動によるキャッシュ・フロー : 将来に向けた運営基盤の確立のために行われる投資活動に係る資金の状態を表し、固定資産の取得・売却等による収入・支出

(4)行政サービス実施コスト計算書

- 業務費用 : 地方独立行政法人が実施する行政サービスのコストのうち、地方独立行政法人の損益計算書に計上される費用
- 自己収入等 : 依頼試験、機器利用等により得た収益
- その他の行政サービス実施コスト : 地方独立行政法人の損益計算書に計上されないが、行政サービスの実施に費やされたと認められるコスト
- 損益外減価償却相当額 : 償却資産のうち、その減価に対応すべき収益の獲得が予定されないものとして特定された資産の減価償却費相当額
- 引当外賞与増加見積額 : 財源措置が運営費交付金により行われることが明らかな場合の賞与引当金増加見積額
- 引当外退職給付増加見積額 : 財源措置が運営費交付金により行われることが明らかな場合の退職給付引当金増加見積額
- 機会費用 : 国又は地方公共団体の財産を無償又は減額された使用料により賃借した場合の本来負担すべき金額など

7 財務情報

① 財務諸表の概要

(1) 経常費用、経常収益、当期総損益、資産、負債、利益剰余金(又は繰越欠損金)、キャッシュ・フローなどの主要な財務データの経年比較・分析(内容・増減理由)
(経常費用)

2020年度の経常費用は8,119百万円と、前年度比383百万円減(4.5%減)となっている。これは、業務費が前年度比490百万円減(8.9%減)、一般管理費が前年度比106百万円増(3.5%増)となったことなどが主な要因である。

(経常収益)

2020年度の経常収益は8,123百万円と前年度比455百万円減(5.3%減)となっている。これは、運営費交付金収益が前年度比284百万円減(4.5%減)、手数料収益が前年度比84百万円減(20.3%減)、使用料収益が前年度比51百万円減(23.3%減)となったことなどが主な要因である。

(臨時損益)

2020年度の臨時利益は1,512百万円と前年度比1,509百万円増(53,354.9%増)となっている。これは、会計基準第79第5項による運営費交付金収益への1,510百万円の振替が主な要因である。

(当期総損益)

上記経常損益及び臨時損益の状況により、2020年度の当期総利益は1,516百万円と、前年度比1,439百万円増(1,872.9%増)となっている。

(資産)

2020年度末現在の資産合計は32,827百万円と、前年度末比657百万円増(2.0%増)となっている。これは、流動資産が前年度比559百万円増(13.8%増)となったこと及び固定資産が前年度比97百万円増(0.3%増)となったことが主な要因である。

(負債)

2020年度末現在の負債合計は7,054百万円と、前年度末比183百万円減(2.5%減)となっている。これは、運営費交付金債務が前年度比1,822百万円減(100.0%減)、未払金が前年度比1,075百万円増(82.4%増)、固定負債が前年度比546百万円増(13.8%増)となったことが主な要因である。

(利益剰余金)

2020年度利益剰余金は2,050百万円で、その内訳は前中期目標期間繰越積立金19百万円、目的積立金102百万円、積立金412百万円、当期末処分利益1,516百万円である。

(業務活動によるキャッシュ・フロー)

2020年度の業務活動によるキャッシュ・フローは1,401百万円と、前年度比386百万円増(38.0%増)となっている。これは、その他の業務支出が前年度比489百万円減(11.7%

減)及び人件費支出が前年度比110百万円増(3.4%増)となったことが主な要因である。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

2020年度の投資活動によるキャッシュ・フローは△343百万円と、前年度比593百万円減(63.3%減)となっている。これは、有形固定資産の取得による支出が前年度比101百万円減(11.2%減)、定期預金の預入による支出が前年度比500百万円減(100.0%減)となったことが主な要因である。

表 主要な財務データの経年比較

(単位：百万円)

区分	平成28年度	平成29年度	平成30年度	2019年度	2020年度
経常費用	8,150	7,550	8,031	8,502	8,119
経常収益	8,366	7,763	8,269	8,579	8,123
当期総利益	215	213	235	76	1,516
資産	33,391	33,188	32,963	32,170	32,827
負債	6,847	7,144	7,396	7,237	7,054
利益剰余金	678	806	866	761	2,050
業務活動によるキャッシュ・フロー	352	1,846	1,652	1,014	1,401
投資活動によるキャッシュ・フロー	△1,513	△1,030	△903	△937	△343
資金期末残高	1,698	2,514	3,263	3,339	4,396

(注1)第3期中期計画期間：平成28年度～2020年度(5年間)

(2) 事業損益の経年比較(セグメント情報)・分析(内容・増減理由)

- ア 技術支援 : 技術支援事業における事業損益は△45百万円と、前年度比42百万円減(1,723.3%減)となっている。これは自己収入が78百万円減(20.0%減)となったことが主な要因である。
- イ 製品開発支援 : 製品開発支援事業における事業損益は4百万円と、前年度比7百万円増(218.7%増)となっている。
- ウ 研究開発 : 研究開発事業における事業損益は0百万円と、前年度比66百万円減(100.0%減)となっている。これは研究に注力したことに伴

う人件費が 83 百万円増 (13.0%増) となったことが主な要因である。

エ 産業サービス : 産業サービス事業における事業損益は 0 百万円と、前年度比 13 百万円減 (100.0%減) となっている。これは自己収入が 33 百万円減 (36.1%減) となったことが主な要因である。

オ その他 : その他事業における事業損益は 0 百万円である。これは主に特定運営費交付金にて実施される都内中小企業の工業製品の出張放射線検査、中小企業の 5G・IoT・ロボット普及促進事業、航空機産業への参入支援事業、障害者スポーツ研究開発推進事業、バイオ基盤技術事業、プラスチック代替素材事業、ものづくりベンチャー事業、都政課題解決プロジェクト、情報システムの整備 (総務財務システム) (以下、「プロジェクト事業」という。) であり、運営費交付金の収益基準が業務達成基準 (費用投入型) を採用しているため、費用と同額の収益が計上される。そのことにより、事業損益は 0 百万円となる。

カ 法人共通 : 法人共通事業における事業損益は 45 百万円と、前年度比 43 百万円増 (1,774.6%増) となっている。これはその他の一般管理費が 34 百万円減 (1.9%減) となったことが主な要因である。

表 事業損益の経年比較 (セグメント情報)

(単位: 百万円)

区分	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	2019 年度	2020 年度
技術支援	248	261	244	△2	△45
製品開発支援	160	176	182	△3	4
研究開発	△130	△116	△124	66	0
産業サービス	△38	7	5	13	0
その他	92	-	-	-	-
法人共通	△116	△115	△70	2	45
合計	215	213	237	76	4

(注 1) 金額欄の計数は、原則としてそれぞれ端数を切捨によって表示しているため、合計とは一致しないものがある。

(注 2) 第 3 期中期計画期間: 平成 28 年度～2020 年度 (5 年間)

(3)セグメント総資産の経年比較・分析（内容・増減理由）

- ア 技術支援 : 技術支援事業における総資産は 837 百万円と、前年度比 177 百万円の増 (26.9%増) となっている。これは、減価償却費 (損益外減価償却相当額含む) 187 百万円による減少及び新規固定資産購入 334 百万円、未収入金の 30 百万円の増加が主な要因である。
- イ 製品開発支援 : 製品開発支援事業における総資産は 504 百万円と、前年度比 112 百万円の減 (18.2%減) となっている。これは、減価償却費 (損益外減価償却相当額含む) 184 百万円による減少及び新規固定資産購入 72 百万円による増加が主な要因である。
- ウ 研究開発 : 研究開発事業における総資産は 491 百万円と、前年度比 27 百万円の減 (5.3%減) となっている。これは、減価償却費 (損益外減価償却相当額含む) 150 百万円による減少及び新規固定資産購入 129 百万円による増加が主な要因である。
- エ 産業サービス : 産業サービス事業における総資産は 281 百万円と、前年度比 11 百万円の増 (4.4%増) となっている。これは、特許権仮勘定の 8 百万円の増加が主な要因である。
- オ その他 : その他事業における総資産は 2,466 百万円と、前年度比 910 百万円の増 (58.5%増) となっている。これは、減価償却費 462 百万円による減少及び新規固定資産購入 1,370 百万円による増加が主な要因である。
- カ 法人共通 : 法人共通事業における総資産は 28,247 百万円と、前年度比 303 百万円の減 (1.0%減) となっている。これは、減価償却費 (損益外減価償却相当額含む) 862 万円による減少及び新規固定資産購入 18 百万円、現金及び預金の 557 百万円の増加が主な要因である。2018 年度より、従前、法人共通事業に含めて表示していた資産を損益と同様にその他事業に区分した。カッコ内は法人共通事業に含めていたプロジェクト事業の金額である。

表 セグメント別総資産比較

(単位：百万円)

区分	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	2019 年度	2020 年度
技術支援	1,240	1,040	814	659	837
製品開発支援	811	837	654	616	504
研究開発	505	428	476	518	491
産業サービス	236	235	267	269	281
その他	9	11	1,432	1,555	2,466
法人共通	30,586	30,634	29,318	28,550	28,247
	(1,199)	(1,285)	(-)	(-)	(-)
合計	33,391	33,188	32,963	32,170	32,827

(注1)金額欄の計数は、原則としてそれぞれ端数を切捨によって表示しているため、合計とは一致しないものがある。

(注2)第3期中期計画期間：平成28年度～2020年度(5年間)

(4) 目的積立金の申請、取崩内容等

主に新規機器の購入（高速 X 線 CT、超高分解能電界放出形走査電子顕微鏡等）に活用するため、目的積立金 227 百万円を取り崩した。

(5) 行政サービス実施コスト計算書の経年比較・分析（内容・増減理由）

2020 年度の行政サービス実施コストは 8,174 百万円と、前年度比 650 百万円減（7.3%減）となっている。これは、業務費用が前年度比 219 百万円減（2.9%減）となっていること及び引当外退職給付増加見積額が前年度比 430 百万円減（133.0%減）となっていることが主な要因である。

表 行政サービス実施コスト計算書の経年比較

(単位：百万円)

	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	2019 年度	2020 年度
業務費用	7,069	6,525	6,900	7,419	7,200
うち損益計算書上の費用	8,150	7,566	8,048	8,505	8,120
うち(控除)自己収入等	△1,081	△1,041	△1,147	△1,086	△920
損益外減価償却相当額	706	713	709	710	675
損益外除売却差額相当額	-	0	-	-	-
引当外賞与増加見積額	2	14	11	7	6
引当外退職給付増加見積額	62	46	218	323	△106
機会費用	383	378	354	363	399
行政サービス実施コスト	8,224	7,678	8,195	8,824	8,174

(注1)金額欄の計数は、原則としてそれぞれ端数を切捨によって表示しているため、合計とは一致しないものがある。

(注2)第3期中期計画期間：平成28年度～2020年度(5年間)

② 重要な設備等の整備等の状況

(1) 当事業年度中に完成した主要施設等

DX推進センターをテレコムセンター内にオープンし、ローカル5G基地局を整備

(取得価格：356百万円)

(工事、試験機器含む)

(2) 当事業年度において継続中の主要施設等の新設・拡充

特になし

(3) 当事業年度中に処分した主要施設等

特になし

③ 予算及び決算の概要

(単位：百万円)

区分	平成 28 年度		平成 29 年度		平成 30 年度		2019 年度		2020 年度	
	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算	予算	決算
収入										
運営費交付金	6,921	6,921	6,317	7,160	6,332	6,968	6,009	7,351	5,085	7,377
施設整備補助金	10	-	10	-	10	4	10	-	10	-
自己収入	1,236	1,219	1,239	1,102	1,242	1,185	1,247	1,109	1,250	970
事業収入	700	718	703	707	706	718	711	701	714	542
補助金収入	60	50	60	48	60	41	60	13	60	30
外部資金研究費等	100	15	100	17	100	21	100	46	100	64
その他収入	376	434	376	328	376	403	376	347	376	333
積立金取崩	35	-	265	85	90	175	37	181	35	227
収入計	8,203	8,140	7,832	8,348	7,675	8,334	7,303	8,642	6,381	8,575
支出										
業務費	5,752	5,424	5,747	5,487	5,650	5,326	5,619	6,432	4,754	7,063
試験研究経費	1,596	1,488	1,810	1,824	1,620	1,600	1,555	2,189	1,542	3,623
外部資金研究経費等	100	15	100	17	100	21	100	46	100	64
東京緊急対策	12	3	12	3	12	3	12	3	12	4
ロボット産業活性化	1,053	966	800	588	872	601	878	990	0	-
役職員人件費	2,990	2,950	3,024	3,052	3,044	3,098	3,074	3,201	3,101	3,371
一般管理費	2,450	2,231	2,085	1,763	2,024	2,382	1,684	1,853	1,627	1,817
支出計	8,203	7,656	7,832	7,250	7,675	7,708	7,303	8,285	6,381	8,881

(注1)金額欄の計数は、原則としてそれぞれ端数を切捨によって表示しているため、合計とは一致しないものがある。

(注2)第3期中期計画期間：平成28年度～2020年度(5年間)

④ 経費削減及び効率に関する目標及びその達成状況

当法人において、運営費交付金事業は、新規、拡充分及び効率化係数対象外事業を除き、一中期目標期間中、毎事業年度につき1%以上の業務効率化を目標にしている。

当法人では、今年度についても前年度の運営費交付金より効率化係数△1%を乗じた金額を受けており、交付時点において既に効率化目標を達成している。

8 事業に関する説明

①財源の内訳

(1)内訳

当法人の経常収益は 8,123 百万円で、その内訳は、運営費交付金収益 6,009 百万円（収益の 73.9%）、手数料収益 328 百万円（収益の 4.0%）、使用料収益 169 百万円（収益の 2.0%）などとなっている。各事業別の収益は、次の表を参照。

表 セグメント別事業費用、事業収益、事業損益及び総資産額

(単位：百万円)

	技術支援	製品開発 支援	研究開発	産業サー ビス	その他	法人共通	合計
事業費用	1,236	590	1,095	514	1,568	3,113	8,119
<内訳>							
業務費							
人件費	819	266	722	329	206	-	2,345
減価償却費	160	102	127	26	462	-	880
業務費	256	221	245	158	865	-	1,747
一般管理費							
人件費	-	-	-	-	33	993	1,026
減価償却費	-	-	-	-	-	319	319
その他の 一般管理費	-	-	-	-	-	1,800	1,800
事業収益	1,191	594	1,095	514	1,568	3,159	8,123
<内訳>							
運営費交付 金収益	717	313	926	429	1,099	2,522	6,009
自己収入	313	178	41	58	5	317	915
その他	160	102	127	26	462	319	1,199
事業損益	△45	4	0	0	-	45	4
総資産	837	504	491	281	2,466	28,247	32,827
<内訳>							
固定資産	775	501	359	276	2,465	23,840	28,220
流動資産	61	2	131	4	0	4,406	4,607

(注)金額欄の計数は、原則としてそれぞれ端数を切捨によって表示しているため、合計とは一致しないものがある。

(2)自己収入の明細

当法人の自己収入は915百万円であり、依頼試験等の手数料収益328百万円(自己収入の35.9%)、機器利用等の使用料収益169百万円(自己収入の18.4%)、国及び地方公共団体等からの受託事業を行う受託事業収益366百万円(自己収入の40.0%)が主な自己収入となる。

② 財務情報及び業務実績に基づく説明

- ア 技術支援 : 技術支援事業は、主に中小企業に対し、職員の専門的な知識を活用し、来所、電話、電子メール等による技術相談や、導入した機器を活用し、高品質、高性能、高安全性など付加価値の高いものづくりを支援する依頼試験を行う。業務の財源は運営費交付金と自己収入であり、事業に要した費用は、1,236百万円(人件費819百万円、減価償却費160百万円、業務費256百万円)となっている。
- イ 製品開発支援 : 製品開発支援事業は、主に中小企業では導入が困難な測定機器や分析機器を整備し、中小企業における新製品・新技術開発のために行う機器利用、自社製品を開発する際の上流工程の技術課題解決に対応するためオーダーメイド開発支援を行う。業務の財源は運営費交付金と自己収入であり、事業に要した費用は、590百万円(人件費266百万円、減価償却費102百万円、業務費221百万円)となっている。
- ウ 研究開発 : 研究開発事業は、主に機械、電気・電子、情報、化学、バイオ等の基盤技術分野に対する基盤研究、基盤研究で得られた研究成果を効率的かつ効果的に実用化へつなげていくため、独自の技術やノウハウを有し意欲のある中小企業や業界団体、大学、研究機関と協力して行う共同研究、技術開発の要素が大きい経済産業省や文部科学省などの提案公募型事業へ積極的に応募し、採択を目指すとともに、採択された研究を行う提案公募型研究を行う。業務の財源は運営費交付金と自己収入であり、事業に要した費用は、1,095百万円(人件費722百万円、減価償却費127百万円、業務費245百万円)となっている。
- エ 産業サービス : 産業サービス事業は、主に公益財団法人東京都中小企業振興公社(以下、「中小企業振興公社」という。)の経営支援部門等他の機関との連携を活用して、セミナーの開催や企業への実地技術支援等を行う技術経営支援、産学公連携の拠点となる「東京イノベーションハブ」にて、中小企業と大学、学協会、研究機

関との連携を促進するセミナーや交流会、展示会を行う産業交流、新技術、産業動向、国際化対応などに関するセミナーや実践に役立つ講習会の開催により、中小企業の新製品・新サービスの創出を担う人材育成を進めるとともに、本部の開設に伴い整備した機器を活用し、研究開発や製造技術の高度化を担う中小企業の産業人材の育成を支援する技術セミナー・講習会、東京都、区市町村、中小企業振興公社、商工会議所、商工会などの支援機関等が実施する講演会、イベント・展示会への参加を通じ、都産技研の事業を積極的に PR し利用拡大につなげる情報発信を行う。業務の財源は運営費交付金と自己収入であり、事業に要した費用は、514 百万円(人件費 329 百万円、減価償却費 26 百万円、業務費 158 百万円)となっている。

オ その他 : その他事業は、主にプロジェクト事業である。この事業の財源は運営費交付金と自己収入であり、事業に要する費用は、1,568 百万円(人件費 239 百万円、減価償却費 462 百万円、業務費 865 百万円)となっている。

カ 法人共通 : 法人共通事業は、上記ア～オ以外の業務を行う。業務の財源は運営費交付金と自己収入であり、事業に要した費用は、3,113 百万円(人件費 993 百万円、減価償却費 319 百万円、一般管理費 1,800 百万円)となっている。

9 業務の根拠となる法律

地方独立行政法人法（平成 15 年法律第 118 号）

10 組織

2006 年 4 月、理事長、理事、監事の下、4 部 1 プロジェクトチームで地方独立行政法人東京都立産業技術研究センターを開設し、第一期中期計画期間を開始した。

2006 年 12 月、独立行政法人科学技術振興機構（JST）地域イノベーション創出総合支援事業「地域結集型研究開発プログラム」への採択により、地域結集事業推進部を立ち上げた。

2008 年 10 月、区部及び多摩地区の産業支援拠点整備のため、経営企画本部に新拠点準備室を設置した。

2010 年 2 月、多摩テクノプラザを設置し、多摩支所及び八王子支所の業務を移管した。

2010 年 4 月、研究開発業務を活性化するため、開発企画室を設置した。

2011年4月、第二期中期計画期間を開始した。

ものづくり産業の総合的支援を推進するため、高度分析開発セクター、システムデザインセクター、実証試験セクターを設置した。

広報業務を強化するため、経営情報室から広報機能を分離し広報室を設置した。

事業化支援本部は、技術経営支援室の研究開発部門を開発本部や3セクターに移管するとともに、産業交流室を廃止し、人材育成や産業交流業務を技術経営支援室へ統合した。

開発本部は、イノベーションの創出・新事業創出型へ転換や技術分野の見直しにより、組織変更を実施した。また、「地域結集型研究開発プログラム」は11月のフェーズⅡ終了に向け研究開発機能を開発本部へ移管し、事業執行管理を行う地域結集事業推進室を設置した。

総務部は、旧施設課の施設管理業務に薬品管理や放射線管理業務を加えた環境安全管理室を新設した。

2011年9月、区部及び多摩地区の産業支援拠点整備が終了したため、新拠点準備室を廃止した。

2011年10月、西が丘本部と旧駒沢支所の機能を集約した本部を開設した。

2012年10月、埼玉、千葉、神奈川及び長野の各県の公設研究機関と連携し、広域首都圏輸出製品技術支援センター(MTEP)に対応する輸出製品技術支援センターを都産技研内に設立した。

2013年4月、事業化支援本部内の組織を、技術開発支援部(技術経営支援室、高度分析開発セクター、システムデザインセクター及び実証試験セクター)と地域技術支援部(城東支所、墨田支所、城南支所)に分離し、部制に変更した。

事業化支援本部に交流連携室を設立するとともに、品質保証推進センターを新設した。

2013年10月、感性工学や生理計測に基づく高付加価値なものづくりを支援する生活技術開発セクターを墨田支所に開所した。

2014年4月、事業化支援本部内の組織を、技術経営支援部、技術開発支援部(4セクター)、地域技術支援部(3支所)に分離することで事業体制を強化した。また、中小企業の海外展開支援を強化するため、技術経営支援部に国際化推進室を新設した。

都内中小企業のサービスロボット開発支援を強化するため、技術開発支援部にロボット開発セクターを新設した。

2015年4月、ASEAN地域に展開する日系中小企業の技術支援をするため、タイ王国にバンコク支所を開設した。

2015年4月、中小企業のロボット分野への参入を支援するため、ロボット事業推進部を新設した。

2016年4月、第三期中期計画期間を開始した。

高付加価値製品の開発を支援するため、3Dものづくりセクター、先端材料開発セクター、複合素材開発セクターを設置した。

開発本部を三部制とし、生活関連産業の付加価値向上を目的とした技術支援サービスを実施するため、開発第三部を新設し、情報技術グループ、デザイン技術グループ、生活技術開発セクターを設置した。

ロボットの開発から安全性評価までを支援する拠点として、東京ロボット産業支援プラザをテレコムセンターに全面オープンした。

2016年7月、高機能繊維や繊維強化材料による製品開発を支援するため、複合素材開発サイトを多摩テクノプラザに開設した。

2018年10月、IoT技術の中小企業への導入・普及を図るため、IoT支援サイトをテレコムセンターに開設した。

2020年4月、バイオ技術を活用した動物実験代替法の開発などを通じて、健康関連分野における中小企業の技術革新および高付加価値製品の開発を支援するため、ヘルスケア産業支援室（SUSCARE）を開設した。

2020年11月、5G関連製品の社会実装拠点として、5G関連の設備とサービスロボットやIoTなどの既存設備を組み合わせ、一体的な製品開発支援が可能となるDX推進センターをテレコムセンターに開設した。

（組織図 次ページ参照）

1.1 職員の状況（2021年3月31日現在。役員除く。）

① 常勤職員

- ・職員数：321名（前事業年度末から6名増）
- ・平均年齢：42.5歳
- ・法人への出向者数：2名

② 非常勤職員

- ・職員数：36名

1 2 事業所の所在地

本 部：東京都江東区青海 2-4-10

城 東 支 所：東京都葛飾区青戸 7-2-5

墨 田 支 所：東京都墨田区横網 1-6-1 KFC ビル 12 階

城 南 支 所：東京都大田区南蒲田 1-20-20

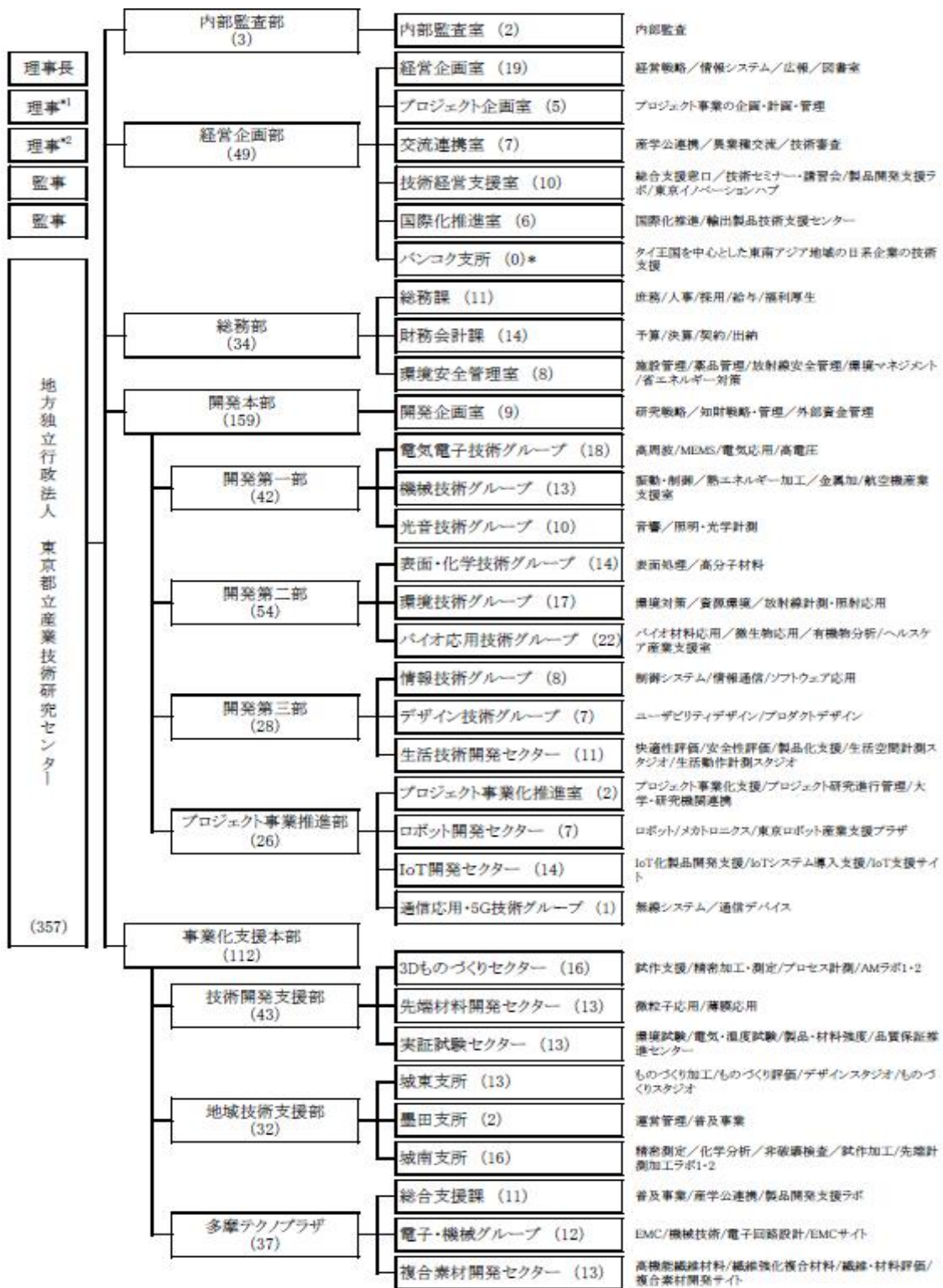
多摩テクノプラザ：東京都昭島市東町 3-6-1

バンコク支所：MIDI Building, 86/6, Soi Treemit, Rama IV Road, Klongtoei, Bangkok
10110.

1 3 資本金の状況

(単位：百万円)

区分	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高
地方公共団体出資金	28,051	0	0	28,051



* :バンコク支所には兼務者3名を配置 (職員名簿参照)

注1 : () 内の数字は職員数。ワイドキャリア (12日型、時間型) を含む。また、兼務者は除く。(2021年3月31日現在)

注2 : 理事^{*1}は開発本部長を兼務。理事^{*2}は事業化支援本部長を兼務。

内部監査部長は内部監査室長。地域技術支援部長は城南支所長。多摩テクノプラザ所長は複合素材開発セクター長。生活技術開発セクター長は墨田支所をそれぞれ兼務。

図1 地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター組織図
(2021年3月31日現在)

○ 2020年度の事業概要

I 住民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するため に取るべき措置

1 東京の産業発展と成長を支える研究開発の推進

1-1 基盤研究

機械、電気・電子、情報、化学、バイオ等の基盤技術分野に対する基盤研究を着実に実施するとともに、中小企業の技術ニーズを踏まえ、付加価値の高い新製品・新サービス開発や技術課題の解決に役立つ技術シーズの蓄積、今後発展が予想される技術分野の強化、都市課題の解決や都民生活の向上に資する研究を基盤研究として実施した。なかでも、今後の成長が期待される環境・エネルギー、生活技術・ヘルスケア、機能性材料、安全・安心の4つの技術分野を重点研究として取り組み、都内中小企業による新しいサービスの創出に貢献した。

また、第一期および第二期中期計画期間中に基盤研究において得られた研究成果を事業化・製品化及び共同研究の実施や外部資金導入研究の採択へ発展させた。

2020年度は重点4分野で55テーマを実施した。

1-2 共同研究

基盤研究で得られた研究成果を効率的かつ効果的に実用化へつなげていくため、独自の技術やノウハウを有し意欲のある中小企業や業界団体、大学、研究機関と協力して、共同研究に積極的に取り組み、成果を展開した。

2020年度は、年度途中で研究テーマを公募により設定し、研究を実施した。

ウェブサイト等で共同研究を公募し、新たに中小企業等と25テーマの共同研究を実施した。また、共同研究による知的財産への成果として、10件の特許等登録を行った。

1-3 外部資金導入研究・調査

(1)外部資金導入研究

技術開発の要素が大きい経済産業省や文部科学省などの提案公募型事業へ積極的に応募し、採択を目指すとともに、採択された研究を確実に実施した。

未利用外部資金の調査を行い、申請可能なものを抽出して積極的に申請した。

提案公募型事業へ積極的に応募し、提案公募型研究について新規33件を含む計76件実施した。

中小企業の技術課題、行政課題解決の迅速な支援のため、受託研究を11件実施した。

未利用外部資金の積極的な活用を図るため、利用可能な提案公募型研究について、募集案内を全職員に通知し、未利用外部資金に新たに6件応募した。

(2) 地域結集型研究

第二期中期計画期間に完了した製品化研究に基づき、これまでに得られた研究成果の継続調査を実施した。

1-4 ロボット産業活性化事業

2015年度より5か年計画で実施してきた「ロボット産業活性化事業」を2019年度に終了し、2020年度より新たに「サービスロボット社会実装支援事業」を開始した。

「ロボット産業活性化事業」では、都産技研独自の技術開発と、公募型共同研究開発事業およびサービスロボットSIer (System Integrator) 人材育成事業を実施し、中小企業との共同により開発したサービスロボット37種の事業化・製品化を東京2020大会の開催時期に合わせて推進してきたが、続く「サービスロボット社会実装支援事業」では、さらなる事業化・製品化を目指し、継続的なアフターフォローを実施した。

1-5 生活関連産業の支援

開発第三部において、生活関連産業の付加価値向上を目的とした技術支援サービスを実施した。従来の情報、デザイン、品質評価などの分野に加え、人間の動きや体型、感覚等に注目した製品開発、評価技術に関わる研究を行った。

2 中小企業の製品・技術開発、新事業展開を支える技術支援

2-1 技術課題解決のための支援

(1) 技術相談

①お客様への確かな技術相談を提供するため、本部の実施体制を継続

中小企業に対し、職員の専門的な知識を活用し、来所、電話、電子メール等による技術相談を実施し、製品開発支援や技術的課題解決に貢献した。

2020年度は技術相談を116,545件実施した。

②総合支援窓口の取組みにより、料金収納及び成績証明書の発行窓口の統合や複数技術分野にまたがる相談への一括対応などサービス機能の統合化を継続

都産技研全職員及び外部機関の相談対応可能分野をデータベース化した都産技研オリジナルの「技術相談検索システム」の情報を適宜改訂することで、利用者への提供情報の最適化と取次時間の短縮をはかり、ワンストップ技術相談サービスの質を向上した。

昨年度に引き続き昼休みも総合支援窓口を開設し、9時～17時まで常時、ご利用カード発行、料金収納、来所及び電話技術相談に対応した。

③幅広い技術相談ニーズに的確に対応するため専門相談員を設置し、中小企業の技術開発を支援

これまで支援の難しかった技術分野の 5 分野の専門相談員（1 名/日）を交代勤務で配置し、相談を継続した。

④ものづくりに関連するサービス産業等の技術相談の積極対応

業務提携している金融機関や経営支援機関と協力し、本部見学等を通じ、幅広い業種へ都産技研を紹介した。

⑤職員や専門家を現地に派遣する実地技術支援を実施

都産技研職員による無料の実地技術支援を 372 件実施した。

技術指導員・エンジニアリングアドバイザーと都産技研職員による無料の実地技術支援を 21 件実施した。

⑥他の試験研究機関や大学、専門知識を有する外部専門家を活用して課題の解決を図り、利用者の要望に対応

都産技研に登録された専門知識を有する外部専門家(全 78 名)による生産現場での実地技術支援を 19 企業に対して 74 日実施した。

⑦協定締結機関と連携した技術相談体制の継続および拡充

協定締結機関との連携によるテレビ会議システムを活用した対面式技術相談を継続した。

協定締結機関である区市等自治体に開設された技術相談窓口での都産技研事業の紹介や技術相談に関する連携を継続した。

金融機関との連携技術相談を実施した。

⑧震災による電力不足に対応するため、都内および被災地中小企業の節電や省エネルギーに関する技術相談や実地技術支援を継続実施

東日本大震災および 2016 年熊本地震復興支援の実施への対応を継続した。

2019 年 8 月・9 月豪雨および台風 19 号への対応を継続した。

新型コロナウイルス感染症への対応を継続した。

(2) 依頼試験

①導入した機器を活用し、高品質、高性能、高安全性など付加価値の高いものづくりを支援できるよう、依頼試験を充実

依頼試験料金算出に係る原価計算の全面的な見直しを実施した。依頼試験体制の充実により高い依頼試験実績を継続した。

2020 年度は依頼試験を 109,884 件実施した。

②JIS 等に定めのない分析・評価など、お客様の個別の試験ニーズに対しては、オーダーメイド試験により柔軟に対応

個別の試験ニーズに対応するため、オーダーメイド試験を 129 件実施した。

③首都圏公設試験研究機関連携体（以下、「TKF」という。）に参加している近隣の公設

試験研究機関と連携した試験実施体制を継続

TKF 参加機関相互の職員研修事業（TKF ミニインターンシップ）を活用し、試験品質の向上に取り組んだ。

- ④本部において、電気および温度分野の計量法認定事業者（JCSS）としての試験業務を継続実施

電気および温度、長さ分野において JCSS としての依頼試験業務を継続した。

- ⑤多摩テクノプラザ EMC サイトにおいて、EMC 分野の試験所認定事業者（VLAC）としての試験業務に代わり、車に搭載する ICT 機器等のニーズの高い依頼試験を実施

安全運転システムなどに関わる車載機器市場への参入や、シェア拡大を目指す企業の支援ニーズに対応するため、車載機器を対象とした電磁両立性（EMC）評価機器を整備し、国際規格対応試験などによる支援を実施した。

- ⑥都産技研の特徴的な技術分野である非破壊検査、照明、音響、高電圧、ガラス技術、環境防かび、放射線技術、高速通信、めっき・塗装複合試験、光学特性計測技術、繊維・複合材料評価試験において、試験精度の向上や試験範囲の拡充など一層高品質なサービスを実施

11 分野を都産技研の特徴的な試験であるブランド試験と位置づけ、試験精度の向上と試験範囲の拡充を行い高品質なサービスを提供した。

- ⑦中小企業ニーズ及び最新技術動向に基づき、試験・研究設備及び機器の導入更新を実施

都産技研ブランド試験や国際規格対応など試験品質強化を目的に機器の整備を実施した。

- ⑧機器の保守・更新、校正管理の適切な実施

公的試験研究機関としての信頼の維持向上を図るため、適切な保守、校正管理を実施した。

- ⑨震災による電力不足に対応するため、中小企業の省エネルギー、高効率化に関する製品開発を促進する依頼試験を継続実施

震災による電力不足、電気料金値上げの対策として中小企業の省エネルギー、高効率化製品の開発支援を継続した。

- ⑩原子力発電所の事故に伴い、工業製品等の放射線量測定試験を継続実施

都内中小企業製品の風評被害対策のために開始した放射線量測定と成績証明書の発行を継続し、持ち込みによる放射線量試験を計 15 件実施した。また、大型の試験品への測定依頼に対しては、測定試験機器を工場等へ持ち込み、職員による現場での測定を 1 件実施した。

2-2 製品開発、品質評価のための支援

(1) 機器利用サービスの提供

- ① 中小企業では導入が困難な測定機器や分析機器を整備し、中小企業における新製品・新技術開発のために機器利用のサービスを提供
機器利用料金算出に係る原価計算の全面的な見直しを実施した。
2020年度は機器利用を103,411件実施した。
- ② 機器の操作方法のアドバイスや、測定データの説明、課題解決のための的確な指導・助言
機器の的確な操作法取得の指導を7,152件実施した。
- ③ 高度な先端機器は利用方法習得セミナーを開催して、機器利用ライセンス制度により利用可能な機器を拡張
高度な先端機器の利用拡大をはかるために、利用方法習得セミナーを開催し、習熟度に基づき機器利用ライセンスを発行する制度を継続した。
- ④ 都産技研ウェブサイトを活用した機器利用可能情報の提供の一時休止
新型コロナウイルス感染症の影響により、機器利用可能情報の提供、インターネット経由での予約申し込み受付は対応を休止した。
- ⑤ 墨田支所において、「生活技術開発セクター」を拠点とし、サービス産業等への技術支援サービスを継続
生活空間の中で製品使用時の人間の動きや特性を計測し、客観的なデータ収集・解析を可能とする生活動作計測スタジオを活用した支援を継続した。
- ⑥ 城南支所において、「先端計測加工ラボ」を活用した先端ものづくり産業支援を継続
先端計測加工ラボ利用企業の伴走支援を実施した。造形試作によるイメージの具現化、試作から製品設計へフィードバックし、最終設計に移行するなど、製品試作及び製品化に向けた助言を実施した。
- ⑦ DX推進センターを開設
5G関連製品の社会実装拠点として、5G関連の設備とサービスロボットやIoTなど既存設備を組み合わせ、一体的な製品開発支援が可能となるDX推進センターをテレコムセンター内に整備した。

(2) 高付加価値製品の開発支援

- ① 本部にアディティブマニュファクチャリング設備による試作・製作支援、三次元CADデータ作成等のデジタルエンジニアリング支援を行うための「3Dものづくりセクター」を設置し、3D技術やリバースエンジニアリングを活用した製品開発を総合的に支援
依頼試験および機器利用を合計24,184件実施した。
- ② 本部に機能性材料、環境対応製品など先端材料製品の開発に用いる高度先端機器を

集中配置した「先端材料開発セクター」を設置し、中小企業による高度な研究開発や技術課題の解決を支援

依頼試験および機器利用を合計 6,651 件実施した。

- ③多摩テクノプラザに産業用繊維や炭素繊維などの複合素材の開発を支援する「複合素材開発セクター」を設置し、成長産業へ参入を希望する中小企業の支援

依頼試験および機器利用を合計 12,804 件実施した。

- ④中小企業が自社製品を開発する際の上流工程の技術課題解決に対応するため、オーダーメイド開発支援を継続

中小企業の製品開発における上流工程・上流設計支援を目的に、製品開発に直接つながる事業として力を注ぎ、463 件を実施した。

- ⑤新製品・新技術開発を目指す中小企業に対する支援施設として「製品開発支援ラボ」を本部に 19 室、多摩テクノプラザに 5 室を引き続き提供

製品開発支援ラボは本部 19 室、多摩テクノプラザ 5 室の計 24 室について本部 98.7%、多摩テクノプラザ 93.3%の入居率で、新製品・新技術開発を目指す中小企業に対する支援を継続した。

- ⑥共同研究企業が無料で利用可能な共同研究開発室を引き続き提供し、迅速な製品の開発を促進

本部共同研究開発室を有効に活用し、共同研究の推進・打ち合わせに利用した。

- ⑦製品開発支援ラボと共同研究開発室の入居者による製品化・事業化を支援するため、共同利用の試作加工室を提供するとともに、技術経営相談などにも幅広く対応できる人材を配置

入居者による製品化・事業化を支援するため、無料で利用できる共用の試作加工室と化学実験室を継続提供した。

本部及び多摩テクノプラザに、入居者の技術相談や問い合わせに対応するため、ラボマネージャー計 3 名を継続配置した。本部の入居者の支援対応を強化するため、半期ごとに入居者の様々な経営課題についてヒアリングを実施した。

- ⑧ものづくりベンチャー育成事業拠点を整備し、支援を開始

東京都ものづくりベンチャー育成事業と連携し、試作支援拠点「Tokyo Startup BEAM デジタルものづくりサイト」を整備し、公募で採択された 12 社を対象に 3D プリンターによる試作支援を開始した。

(3) 製品の品質評価支援

本部において、「実証試験セクター」を活用し、中小企業の安全で信頼性の高い製品開発を支援するために、技術相談、依頼試験、機器利用をワンストップで効率的に技術支援

依頼試験および機器利用を合計 60,008 件実施した。

2-3 新事業展開、新分野開拓のための支援

(1) 技術経営への支援

- ①公益財団法人東京都中小企業振興公社（以下、「中小企業振興公社」という。）の経営支援部門等他の機関との連携を活用して、セミナーの開催や企業への実地技術支援等を実施

中小企業振興公社と連携した共催セミナー等を開催した。

また、中小企業振興公社と連携した実地技術支援は全 289 件実施し、技術支援と経営支援を効果的に実施した。

- ②研究の成果として得た新技術に関して特許の出願に努めるとともに、使用許諾を推進し中小企業支援に活用

全 57 件の知的財産に関する出願を実施した。

特許出願：41 件（PCT 出願、各国移行外国出願等を含む）、意匠登録出願：15 件、商標登録出願 1 件

また、保有特許権等 478 件（出願中、実用新案、意匠、商標、外国出願等を含む）のうち、本年度の新規実施許諾 14 件を含め、全 72 件の特許等を延べ 80 件使用許諾した。

(2) 技術審査への貢献

- ①東京都や自治体、経営支援機関等が実施する中小企業等への助成や表彰などの際に行われる技術審査に積極的に協力

東京都や自治体、経営支援機関等が実施する中小企業の優秀製品、優秀技術の発掘に寄与するため、延べ 5,141 件の審査を実施した。

- ②審査・評価の公平かつ中立な実施と、精度の維持向上を図るため、最新の技術情報の収集・研究や研修等の実施により審査スキルを向上

「技術審査の手引き」を更新し、各審査の事業趣旨、審査の着眼点を見直しに加え、新規審査案件を追加するなど、審査業務の精度の維持向上に努めた。

2-4 中小企業の海外展開を支える支援

(1) 国際規格対応への支援

- ①輸出製品技術支援センターを支援拠点として、中小企業が製品輸出や海外進出を行なう際に必要な国際規格への適合性などの技術情報を提供

MTEP 専門相談員による海外規格解説テキストを 2 冊追加作成した。

- ②海外展開を目指す中小企業を支援するため、輸出製品に関する相談体制を強化する

とともに、海外取引に関する技術セミナーを開催

専門相談員を、連携機関を合わせ 31 名体制で継続した。

セミナー等に職員および専門相談員を派遣し普及活動を推進した。

- ③中小企業が海外展開等で必要となる国際規格に対応した試験により都内中小企業の海外展開を支援

2020 年度は国際規格に対応する依頼試験を合計 5,387 件実施した。

- ④中小企業の航空機産業への参入を技術的に支援するため、試作部品の技術検証の支援や航空機に使用される国際規格に準拠した試験を実施

ASTM 規格に対応した試験設備の導入等により、中小企業の部品試作における支援体制を強化した。

(2) 海外支援拠点による支援

- ①タイ王国に開設したバンコク支所で海外進出した企業への現地技術支援事業を実施

職員を 3 名配置し、2020 年度の利用実績は 107 件であった。また、都産技研協定締結機関と共同で交流会を開催した。

- ②海外機関との交流により、現地情報を収集

タイで開催された展示会 METALEX2020 展 (BITEC) の視察を実施した。

3 多様な主体による連携の推進

3-1 産学公金連携による支援

- ①本部において、産学公連携の拠点となる「東京イノベーションハブ」にて、中小企業と大学、学協会、研究機関、金融機関との連携を促進するセミナーや交流会、展示会を開催

都産技研主催のビジネスマッチング交流会として東京イノベーション発信交流会 (オンライン) を開催した。

- ②公立大学法人東京都立大学 (以下、「東京都立大学」という。) など豊富な技術シーズを有する大学や研究機関と中小企業とのマッチングの場を提供

東京都立大学施策提案発表会において、5 件の発表を行った。

- ③企業同士の連携に意欲のある企業に対して、異業種交流会を立ち上げるとともに、既存グループの活動支援を実施

異業種交流活動の活性化と新グループの結成支援を目的とした取り組みを実施し、1 グループの結成を支援した。

- ④業界団体との業種別交流会はコロナ禍の影響を受け中止

- ⑤中小企業の技術者等で構成する技術研究会を通じて、共同で技術的課題を解決

2020 年度は 7 団体の技術研究会で活動を実施した。計 27 回開催 (うち、Web 開催

21回) し、延べ 328 名が参加して共同で技術的課題の解決を図った。

3-2 行政及び他の支援機関との連携による支援

①区市町村との連携強化に努め、地域における産業振興の取組に貢献するとともに都産技研の利用を促進

区市町村との連携を強化するため、新たに国内 2 機関と連携協定を締結した。連携機関を全 65 機関に拡大し、都産技研の利用促進を図った。また、自治体の事業への協力等により、地域における産業振興の取組みに貢献した。

②首都圏の公設試験研究機関が相互に連携・補完して広域的に中小企業の支援を実施している TKF の活動を継続することにより、広域的なワンストップサービスを確保し、中小企業への技術支援を充実

会員機関同士の情報交換・議論の場として首都圏公設試連携推進会議を開催した。中小企業向けの情報提供の場として TKF オープンフォーラムをオンデマンド配信にて開催した。

③都産技研を利用した中小企業において、製品化や事業化の際に生じる開発資金の調達、販路の開拓などが円滑に進められるよう、中小企業振興公社等の経営支援機関と連携した事業を実施

中小企業振興公社等と連携し、経営と技術の両面から企業への連携支援を実施した。

④東京都との「放射性物質等による災害時等対応に関する協定」に基づき、放射線量測定試験を継続実施

東京都との協定に基づき、24 時間体制で大気浮遊塵の環境放射能測定を計 365 件実施した。2011 年 3 月 15 日に開始した東京都産業労働局ウェブサイトでの測定結果の公表を継続実施した。

4 東京の産業を支える産業人材の育成

4-1 技術者の育成

新技術、産業動向、国際化対応などに関するセミナーや実践に役立つ講習会の開催により、中小企業の新製品・新サービスの創出を担う人材育成を進めるとともに、本部の開設に伴い整備した機器を活用し、研究開発や製造技術の高度化を担う中小企業の産業人材の育成を支援した。

中小企業の人材育成、技術力向上、最新技術動向の提供を目的として、技術セミナー及び講習会等を計 66 件開催した。

4-2 関係機関との連携による人材育成

東京都立大学をはじめとする大学、学術団体、業界団体、行政機関等が実施している

産業人材育成の取り組みに対して、職員の講師派遣、研修学生の受入れなどで積極的に協力した。

インターンシップ（1ヶ月未満）の受け入れは、2020年度は、オリンピック、パラリンピック大会予定期間と重なり、都産技研近隣が競技会場となることから受け入れ困難なため実施しなかった。研修学生（1ヶ月以上）は計10機関延べ22名受入れ、人材育成や専門技術の技能習得に寄与した。

サービス業や卸売業・小売業の従事者向けにおいても、都産技研の設備や人材を活かした実践的なセミナーを実施した。

個別企業や業界団体等の人材育成ニーズに対して、希望に対応したカリキュラムを編成するオーダーメイドセミナーを実施し、人材育成ニーズにきめ細かく対応した。

4-3 海外展開に必要なグローバル人材の育成

中小企業が海外へ事業を展開する際には現地の経営環境や市場動向に詳しい人材の育成が必要であることを踏まえ、金融機関などの連携締結機関の情報や他の産業支援機関を活用した実践的なセミナーを実施した。

5 情報発信・情報提供の推進

5-1 情報発信

東京都、区市町村、中小企業振興公社、商工会議所、商工会などの支援機関等が実施する講演会、イベント・展示会への参加を通じ、都産技研の事業を積極的にPRし利用拡大につなげた。

ヴァーチャル産業交流展2020の首都圏テクノネットワークゾーンに出展し、デジタルコンテンツを活用して、都産技研事業案内をはじめ、ヘルスケア産業支援室やDX推進センター事業等の紹介を行った。

都産技研が開催するTIRIクロスミーティング2020（来所とライブ配信のハイブリッド方式により開催）やTKF参加の各公設試験研究機関が行う研究発表会の間で、相互に発表者を派遣し合うなどし、研究機関が保有する技術シーズや研究成果を広く中小企業に発信した。

5-2 情報提供

①中小企業の製品開発や生産活動に役立つ情報をインターネットや技術情報誌等の広報媒体により速やかに提供

都産技研ウェブサイトにて、利用者の知りたい情報や都産技研の知ってほしい情報等を掲載した。

②本部の公開図書室を活用し、中小企業に役立つ技術資料等を公開

平積みで保管していたデザイン関連の大型本用の書架を購入し目に付きやすい場所に設置した。図書システム外で管理していた合冊製本雑誌約 4,900 冊の図書システムへの登録を実施し検索性を高めるなど、来室者の利便性を向上した。

II 業務運営の改善及び効率化に関する事項

1 組織体制及び運営

1-1 機動性の高い組織体制の確保

①事業動向等を踏まえ組織の見直しを継続的に実施し、各事業の効率的な執行体制を確保

1) 内部統制等推進体制の強化

監事（弁護士）の新たな就任とあわせ、理事長直轄の内部監査室を内部監査部に格上げし、内部統制を一層強力に推進した。

2) 中小企業振興公社との人事交流を開始

2019 年度に開始した人事交流を継続し、双方の組織の活性化と人材の育成を図った。

3) プロジェクト企画室の設置

開発本部開発企画室プロジェクト企画係を経営企画部プロジェクト企画室に再編し、プロジェクト事業の企画・管理・運営をより機動的に実施した。

4) ヘルスケア産業支援室の新設

ヘルスケア産業の活性化のため、ヘルスケア産業支援室を新設し、化粧品分野を軸に製品化・事業化を目指す中小企業を支援する体制を整備した。

5) 通信応用・5G 技術グループの新設

中小企業における 5G 事業を迅速に立ち上げるため、5G 次世代通信応用担当部長および通信応用・5G 技術グループを新設し、5G 技術の支援体制を整備した。

②既存組織体制にとらわれず、適時プロジェクトチームを設置するなど、ニーズに柔軟に対応

都産技研内の組織の垣根を乗り越え、複数の組織を横断したチームを構成し、統合的に課題を解決する協創的研究開発を実施した。

個人情報保護および情報セキュリティ対策を統一的に行うため、情報資産管理委員会を年 2 回実施し、文書管理や情報セキュリティ体制の構築について調査・検討した。

次期中期計画期間の大きなテーマとなるデジタルトランスフォーメーションの推進に向け、正式な組織設置に先立ちデジタル化推進室準備プロジェクトチームを設置することで、都産技研のデジタル化を進めていく上での課題や問題点を抽出し、次年度の円滑な業務スタートに向けて準備した。

1-2 適正な組織運営の確保

- ①事業別のセグメント管理を導入することにより、各事業において投入した経営資源と事業効果の検証を継続

研究部門全所属の研究員を対象に業務時間分析調査を通年(年4回)で実施した。

研究員業務時間分析結果等を活用し、事業別セグメント管理を実施した。

- ②都内中小企業に対して高品質な技術支援サービスを安定かつ継続的に提供する適切な組織運営を継続

高品質な技術支援サービスを安定かつ継続的に提供するため、昼休み時における技術相談窓口と払い込み窓口の継続的開設等、総合支援窓口サービスの充実に取り組んだ。

- ③中期目標等に基づき法令等を遵守しつつ業務を行い、都産技研のミッションを有効かつ効率的に果たすため、内部統制体制の整備・運用を実施

4月に理事長直轄の内部監査部を設置し、既存組織から独立性を高め監査の品質を確保した。

コンプライアンス委員会を設置し、所内における内部統制・コンプライアンスに関する取組みを総括(4回開催)した。

内部統制の強化に向け、監事(弁護士)が新たに就任し、監事による内部統制を支援するための事務局運営をするなど、監事による内部統制を推進した。

包括外部監査の結果に基づく改善計画の策定や計画の進捗状況の確認など、包括外部監査指摘事項への対応を行った。

法人における不正行為等の発生抑制、早期発見および是正を図るための通報制度を運用した。

職員意識調査結果説明会の開催や他団体と連携した内部統制の取り組みなど、法務その他の内部統制を実施した。

1-3 職員の確保・育成

- ①大学訪問などの積極的なリクルート活動により優秀な技術職員を計画的に採用

2021年度採用一般型研究員の採用試験、面接を実施し、7名の採用を決定した。

2022年度採用に向けた合同企業説明会・学内セミナー・都産技研就職説明会をオンラインで実施するなど、採用活動のデジタル化を推進した。

- ②地方独立行政法人の機動的で柔軟な組織運営に必要な事務職員についても、計画的に確保

「新卒向け企業紹介・就職支援サービス」活用により、公的事業への意識の高い学生の採用活動を実施した。

- ③公平な業績評価とその昇給等への適切な反映により、職員一人ひとりのモチベーシ

ョンを高めるとともにそのレベルアップを進め、組織運営の効率化や、技術支援及び研究開発の水準の向上を推進

都産技研の標準的な職務要件を定め、各職、職層ごとに、求められる人材像と、職務遂行にあたって標準的に必要とされる職務要件や能力などを職員に周知した。

④中小企業の国際化を適切に支援していくため、職員の海外での学会参加による情報収集など国際規格の相談に対応できる職員の育成を継続

海外で開催される学会発表への参加による情報収集の実施や国内外の規制に関するセミナーへの参加により中小企業の国際化に対応できる職員の育成を行った。

1-4 情報システム化の推進・情報セキュリティ対策の徹底

ネットワークやインターネット、人事・庶務システムなどの都産技研の業務運営に欠かせない情報システム基盤を活用し、情報システムの利便性向上、業務の効率化、セキュリティの向上等を図った。また、Web 会議システム等による遠隔相談など情報システムを活用した利便性の向上に努めた。

業務系システムの更新（次期名称：技術支援業務管理システム）に向けて、開発業者と要求定義、設計作業を実施した。

間接部門における相談受付・問い合わせ対応用の共用組織メールアドレスシステムについてオンプレミス環境（サイボウズメールワイズ）からクラウドサービス（メールディーラー）への移行準備を行った。

クライアント証明書（802.1x 認証）を用いた無線通信の展開及び端末の配布（約 180 台）を行った。

本部サーバー室向け無停電電源装置の更新を行った。

テレコムセンターの通信構成を本部から独立したネットワークセグメント（支所相当）に変更し、組織再編に伴うテレコムセンター内の部署増設、人員増加に対応した。

テレビ会議システムや Web 会議システムを活用し、職員の移動時間や移動費用を削減した。

情報資産の内容、取り扱い実態を踏まえて、機密性に関する定義の見直し作業を実施した。

新型コロナウイルス感染症（緊急事態宣言）対応として緊急事態宣言発令後、早期に効率的に在宅勤務を行えるようテレワークサービス、Web 会議サービスを導入・展開した。

2 業務運営の効率化と経費節減

2-1 業務改革の推進

お客様へのサービスの向上、業務の効率化、経費の削減等を目的として、組織と職員

からの提案により、業務内容や処理手続きの見直等の業務改革を推進し、外部機関の活用も含め高い経営品質の実現や利用者満足度の向上を目指した。

各部門でリーダーを中心とした少人数チームを構成し、管理部門への要望も含め、合計 43 テーマの業務改革を実施した。

2-2 財政運営の効率化

標準運営費交付金（プロジェクト的経費を除く。）を充当して行う業務については、中小企業ニーズの低下した業務の見直しや複数年契約の推進による効率化を進めた。

管理委託等について複数年契約を 24 件実施し、財政運営を効率化した。

Ⅲ 財務内容の改善に関する事項

1 資産の適正な管理運用

安全かつ効率的な資金運用管理を推進し、建物、施設については、計画的な維持管理を行うとともに、設備機器については校正・保守・点検を的確に行うことにより国内規格や国際規格に適合する測定等が確実に実施できるよう管理運用した。

資金管理規則により、資金の適正かつ効率的な管理を実施した。

保有する機器等の校正、保守を計 390 件実施し、国内規格や国際規格に適合する測定等が確実に実施できるよう適切な管理を実施した。

2 剰余金の適切な活用

主に新規機器の購入（高速 X 線 CT、超高分解能電界放出形走査電子顕微鏡等）に活用した。

IV 予算（人件費の見積りを含む。）

1 予算

（単位：百万円）

区 分	技術支援				製品開発支援			
	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考
収入								
運営費交付金	1,358	815	△542		88	385	297	
施設整備費補助金	-	-	-		-	-	-	
自己収入	430	343	△86		214	178	△35	
事業収入	400	313	△86		214	178	△35	
補助金収入	30	30	-		-	-	-	
外部資金研究費等	-	0	0		-	-	-	
その他収入	-	0	0		-	0	0	
積立金取崩	11	197	186		12	-	△12	
収入 計	1,799	1,356	△442		314	563	249	
支出								
業務費	1,799	1,410	△388		314	560	246	
試験研究経費	969	590	△378		59	293	234	
外部資金研究経費等	-	0	0		-	-	-	
東京緊急対策	-	-	-		-	-	-	
ロボット産業活性化	-	-	-		-	-	-	
役職員人件費	830	819	△10		255	266	11	
一般管理費	-	-	-		-	-	-	
支出 計	1,799	1,410	△388		314	560	246	
収入 - 支出	-	△53	△53		-	3	3	

(単位：百万円)

区 分	研究開発				産業サービス			
	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考
収入								
運営費交付金	834	1,043	209		398	426	28	
施設整備費補助金	-	-	-		-	-	-	
自己収入	130	64	△65		176	59	△116	
事業収入	-	-	-		100	44	△55	
補助金収入	30	-	△30		-	-	-	
外部資金研究費等	100	64	△35		-	-	-	
その他収入	-	0	0		76	15	△60	
積立金取崩	12	21	9		-	-	-	
収入 計	976	1,130	154		574	485	△88	
支出								
業務費	976	1,085	109		574	528	△45	
試験研究経費	196	298	102		128	198	70	
外部資金研究経費等	100	64	△35		-	-	-	
東京緊急対策	-	-	-		-	-	-	
ロボット産業活性化	-	-	-		-	-	-	
役職員人件費	680	722	42		446	329	△116	
一般管理費	-	-	-		-	-	-	
支出 計	976	1,085	109		574	528	△45	
収入 - 支出	-	45	45		-	△42	△42	

(単位：百万円)

区 分	法人共通				その他			
	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考
収入								
運営費交付金	2,215	2,530	315		192	2,176	1,984	
施設整備費補助金	10	-	△10		-	-	-	
自己収入	-	317	317		300	5	△294	
事業収入	-	0	0		-	5	5	
補助金収入	-	-	-		-	-	-	
外部資金研究費等	-	-	-		-	-	-	
その他収入	-	317	317		300	-	△300	
積立金取崩	-	7	7		-	-	-	
収入 計	2,225	2,855	630		493	2,182	1,689	
支出								
業務費	898	993	95		193	2,485	2,292	
試験研究経費	190	-	△190		-	2,241	2,241	
外部資金研究経費等	-	-	-		-	-	-	
東京緊急対策	-	-	-		12	4	△7	
ロボット産業活性化	-	-	-		0	-	0	
役職員人件費	708	993	285		181	239	58	
一般管理費	1,327	1,817	490		300	-	△300	
支出 計	2,225	2,811	586		493	2,485	1,992	
収入 - 支出	-	44	44		-	△303	△303	

(単位：百万円)

区 分	合計			
	予算	決算	差額 (決算-予算)	備考
収入				
運営費交付金	5,085	7,377	2,292	
施設整備費補助金	10	-	△10	
自己収入	1,250	970	△280	
事業収入	714	542	△171	
補助金収入	60	30	△30	
外部資金研究費等	100	64	△35	
その他収入	376	333	△43	
積立金取崩	35	227	192	
収入 計	6,381	8,575	2,194	
支出				
業務費	4,754	7,063	2,309	
試験研究経費	1,542	3,623	2,081	
外部資金研究経費等	100	64	△35	
東京緊急対策	12	4	△7	
ロボット産業活性化	0	-	0	
役職員人件費	3,101	3,371	271	
一般管理費	1,627	1,817	190	
支出 計	6,381	8,881	2,500	
収入 - 支出	-	△306	△306	

V 短期借入金の限度額

1 短期借入金の限度額

短期借入金実績なし

2 想定される理由

運営費交付金の受入れ遅滞及び予見できなかった不測の事態の発生等により、緊急に借り入れの必要が生じることが想定される。

実績なし

VI 重要な財産を譲渡し、又は担保に供しようとするときは、その計画

なし

VII 剰余金及び積立金の使途

2020年度は、主に新規機器の購入（高速X線CT、超高分解能電界放出形走査電子顕微鏡等）に活用するため、剰余金227百万円を取り崩した。

前中期目標期間繰越積立金は19百万円である。2020年度の使途実績はなし。

VIII その他業務運営に関する重要事項

1 施設・設備の整備と活用

業務の確実な実施と機能向上のための施設・設備の整備を計画的に実施した。

実施に当たっては、東京都からの施設整備補助金等の財源を適切に確保し、策定する長期保全計画に基づき総合的・長期的観点に立った整備・更新を行った。

2020年度は、本部、多摩テクノプラザ、城東支所、城南支所および墨田支所の維持補修工事等を計92件実施した。

2 危機管理対策の推進

第一期中に策定した「リスクマネジメントに関する基本方針」に基づき、内部危機管理体制の整備を継続した。

①個人情報や企業情報、また製品開発等の職務上知り得た秘密については、適正な取扱いと確実な漏洩防止のために、全職員の受講を必須とする研修を実施

情報の適正な取扱いと確実な漏洩防止を図るために、全職員受講のコンプライアンス研修を実施するとともに、新規採用者の新任研修の一部として情報セキュリティ研修を実施した。

②環境保全や規制物質管理、労働安全衛生に関する法令を遵守し、危険物、毒劇物の管理と取扱い、災害に対する管理体制を確保するとともに、防災訓練等の実施や職員に

対する意識向上のための研修を実施

関係法令に基づく安全点検を実施し改善を行うなど、化学物質等や高圧ガスの適切な管理に取り組んだ。

放射線等施設は放射線障害防止関連法令の規定に基づき、文部科学省への申請を行い、各職員の被曝管理、健康管理、教育訓練を実施するとともに放射線管理区域内、同管理区域境界及び事業所境界の定期放射線量を測定した。

③震災の発生や新興感染症の流行などに備え、対応策を定めるとともに、万が一発生した場合には、被害拡大の防止に向けた対策を実施

1)地震や火災等の各種災害を想定し、全事業所において実地訓練を実施した。

2)新型コロナウイルス感染症対策を実施した。

a)感染拡大防止等を目的に、自宅勤務制度を導入(4月)

b)人との接触を極力抑える観点から、時差勤務の対象範囲を拡充(6区分)(7月)

c)全所属の職員等の健康状況等を毎日把握、体調不良の職員等に対しては、適正な対応を行うことで、感染拡大等を未然に防止

d)来場者対応(本部)

【感染拡大防止への協力依頼】

ウェブサイトでの協力依頼掲載のほか、本部内各所に協力依頼ポスターを掲示した。

【1階総合受付(お客様)】【通用口受付(業者)】

アクリルパネルを設置し、健康チェックシート、非接触式の体温検温器による健康チェックを実施した。

e)共用部の消毒・清掃頻度の増加(本部)

エレベーター操作ボタンや階段手摺等、不特定多数が触れる恐れがある場所の消毒および清掃を毎日かつ複数回実施した。

f)トイレでのウイルス飛散防止対策

ハンドドライヤーや共用の洗面台拭きクロスを使用停止した。

全てのトイレ個室に、ウイルス飛散防止のため蓋を閉めて流すようポスターを掲示した。

g)本部内の執務室や会議室、研修室、相談室での機械換気を強化

h)陽性者確認後の迅速な消毒を実施

i)所内各所にエタノール等の手指消毒用品を設置

j)感染者発生時の所内感染拡大防止に向けた適切な対応

職員の感染判明時には、保健所との連絡調整、執行室内の消毒、職員への注意喚起等を適切かつ迅速に実施することで、所内での連鎖的な感染拡大を防止し、所内感染ゼロを実現した。

④緊急事態の発生を想定し、対策委員会の設置、緊急連絡網の設定、通報訓練の実施等をマニュアルとしてまとめるなど、迅速な情報伝達・意思決定に向けた管理体制を整備

業務事故、業務トラブル、ヒヤリ・ハットの発生状況を取りまとめ、全所的に周知、再発防止を図った。

都産技研としての対策を総合的かつ強力に推進するため、クライシスマネジメント要綱に基づいて前年度に設置した新型コロナウイルス感染症対策本部を中心に、状況に応じて迅速かつ適切な判断を行い、新型コロナウイルス感染症拡大の状況下においても継続可能な管理体制を継続した。

3 社会的責任

3-1 情報公開

情報公開、入札情報など都産技研の事業に係わる各種情報をウェブサイト上で随時提供するとともに、事業案内などの刊行物による経営情報等の公開を実施した。

情報開示請求は0件であった。

3-2 環境への配慮

法人の社会的責任を踏まえ、省エネルギー対策の推進、CO₂削減等、「環境方針」に沿った取組により環境負荷の低減や環境改善に配慮した業務運営を実施した。

3-3 法人倫理

都民から高い信頼性を得られるよう、「地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター憲章」等を踏まえ、法令遵守を徹底するとともに、職務執行に対する中立性と公平性を確保しつつ、高い倫理観を持って業務を実施した。

規程に基づき申告体制を整備し、全職員を対象としたeラーニングでの研修を実施することで、利益相反マネジメント体制を強化した。

生命科学実験を伴う支援事業・研究事業においては、事業倫理審査委員会により実施妥当性の確実な審査を行うとともにeラーニングによる職員研修を実施した。

研究活動における不正防止の取組みとして、研究ミスコンダクト防止研修を継続実施した。また、コンプライアンス研修等の職員研修の実施により、職務執行に対する中立性と公平性を確保した。

セクシュアル・ハラスメント、パワー・ハラスメントに対する相談窓口として、複数の部署から男女2名ずつの担当者を選任し、所内に周知を行った。

通報制度の窓口として、内部相談窓口（職員3名）に加えて、弁護士（1名）による外部相談窓口の設置を継続した。